

III マルコポーロの東方

10 マルコ・ポーロ写本<sup>1\*</sup>



FB<sup>2</sup> : OBL Ms Bodlay 264, f. 218r

## 0 はじめに

十九世紀末その大著によってマルコ・ポーロ研究の礎を築いたユールは、かの旅行記を「偉大なる謎の書」<sup>1</sup>と呼んだ。それは、実在したかすら確かでないその著者、本当かどうか分からないその旅、誰によって書かれたのかも明らかでないその書、一つとして同じものはないといわれるほどにそれぞれに異なる稿本と、マルコ・ポーロにまつわる全てを指していた。

そして数百年を経た二十一世紀始めの今日、基本的にはなお「謎」のまま残っているとよい。その間、ポーロの旅と書と当時の世界の研究は格段に進み、そこに記されてあることの実事であることはより多くまた詳しく証明され、かの書に対する信頼と評価はさらに高まっているが、その旅そのもの、すなわちマルコ・ポーロなる人物が長く東方に旅したこと、そして中国にあってクビライ・カアンに仕えたことなどを確固たる事実として証言する記録は、今なおヨーロッパにもアジアにも見つかっていない。そのことは、そこに書かれてある事ははたして本当にポーロの手になるものかとの根本的な疑いと結びつかずにはおかない。その疑いをさらに増幅させるのが、写本によりテキストにより大きくまた小さく異なるその内容と表現であり、とりわけ二つの系統のテキストの間の、誰の目にも明らかな大きな隔たりであった。

十九世紀始めマースドゥンやフランス地理学協会に始まり、バルデッリ-ボーニ、ポーチェそしてユールらに繋がる近代の研究は、各種の写本を校訂・刊行し、それらの中にマルコのオリジナルテキストを探求することによってこの問題に答えようとしてきた。しかしそれらが、単独写本の刊行かせいぜい数種類の稿本の対校、あるいは既存テキストとの対照にとどまっていたのに対して、ヨーロッパ各地に現存するほぼ全ての写本を調査し、詳細厳密に対校・対照することによってそれら全ての系譜関係を確立し、テキストの成立過程に新たな説を打ち立てたのが、自ら校訂したパリ国立図書館写本 Ms.fr.1116 に、その膨大にして緻密な研究「写本の伝統」を序に付して 1928 年に出版したフィレンツェの中世文献学者ルイーダ・フォスコロ・ベネデットであった<sup>2</sup>。

それまでは、今あるごとく種々に異なる版が存在するようになったのは、1298 年ジェノヴァの獄で編まれたオリジナルに解放後のヴェネツィアでマルコ自身によって、あるいは後世に写字生や編者が新たな記事を書き加え、それが次々と新たな転写本の中に取り込まれたためと考えられていたのに対し、詳細は後述するがベネデットは、現存する各種写本に様々に残っているほぼ全ての記事がジェノヴァのオリジナルに最初から含まれていたのだが、それが次々と転記される過程

で省略されたり短縮されたりして徐々に抜け落ち、それによって今あるごとく種々に異なる版が存在するようになった、との正反対の結論に達した。

この結論そのものは、ベネデットの検証がもっぱら言葉の側からの文献学的な考証であって内容の側からの歴史的な実証を欠いていること、史実に反する記事の存在すること、彼の言う省略や短縮の原因と理由が十分に根拠付けられないことなどから、必ずしも全てそのままには受け入れられているわけではないが、その研究自体、すなわち各種写本やテキストの対校と分析、その分類と位置付け、そして全体の系譜関係は精緻を極めた説得力あるものであり、その後の全てのマルコ・ポーロテキスト研究の基礎をなすものであった。以下ここでは、主に上記ベネデットの研究に拠りつつ他にユール、ムール<sup>3</sup>等と合わせて諸写本とテキストの全体を概観する<sup>4</sup>。

## 1 写本とテキスト<sup>2\*</sup>

今に伝わる 2 百余の写本とそれらに基づく刊行テキストは、その形式と内容、すなわち用いられている言語と含まれている記事とによって、基本的に以下の七つの家族もしくはグループに大別される（括弧内は一般に用いられている略号）。1) フランス語地理学協会版 (F) 2) 標準フランス語グレゴワール版 (FG) 3) トスカナ語版 (TA) 4) ヴェネト語版 (VA) 5) ピピーノのラテン語版 (P) 6) ラテン語セラダ版 (Z) 7) ラムージョのイタリア語集成版 (R)、である。内容の点では二つの大グループに分かれ、(1) から (5) すなわち F・FG・TA・VA・P からなるグループ A もしくは F 系と、(6) と (7) すなわち Z と R からなるグループ B もしくは Z 系に分かれる。後者 B グループは前者 A グループにない多数の記事を含むのに対して、前者の記事は後者の両方もしくはどちらかに全て含まれている。また、前者が内容的に基本的に互いに一致するのに対して、後者 Z と R は相互に異なる記事を少なからずもつ。

### 1) 地理学協会版 (F)<sup>5</sup>

現存する 20 のフランス語写本のうち、パリ国立図書館写本 Ms.fr.1116 (F)のみは極めてイタリア語がかった奇妙な独特のフランス語で書かれている。この稿本は 1824 年フランス地理学協会からルーの編纂で『旅行記回想録集』*Recueil de Voyages et de Mémoires* 中に初めて刊行されたことから、地理学協会版 Geography Text と通称される。その序文には、同書は「1298 年ジェノヴァの獄にて同囚のリュスタショー・ド・ピズに記述させた」とはっきりと記されてあった。それまで広く普及していたピピーノのラテン語版やラムージョのイタリア語

版にはこの執筆者の名前はなく、そのことは一般には知られていなかった。そして 1833 年、その序文の冒頭の文章が同じ作者の名を冠したさる円卓騎士物語『ギーロン・ル・クルトワ』 *Guiron le Courtois* の冒頭の文章と全く同じであることが、ポラン・パリシによって指摘された。こうして、作者の名前と冒頭の文章の一致により、マルコ・ポーロ旅行記もルスティケッロによって筆録されたものであることが確かなものとなった。その結果、それまではラテン語やマルコの母語ヴェネト方言が有力視されていたのが、1298 年ジェノヴァで彼により編まれたという最初のものは、この Ms.fr.1116 のような姿であったのではあるまいかと、一致して疑われるところとなった。

1928 年上述の研究でベネデットは、そのルスティケッロの騎士物語の最も古い写本パリ国立図書館 Ms.fr.1463 とこの Ms.fr.1116 を綿密に照合し、冒頭の文章のみならず全編において語彙・表現・文体や場面・台詞・様式に至るまで基本的な一致を見せることを検証し、筆者が同一人物であることをさらに確かなものとした。語彙と語形においてイタリア語の影響を深くまた様々に受けている混合フランス語であるその文体を、まさしく千二百年代にフランス語で著作活動を行っていたイタリア人作家のものとし、それを「フランク-イタリア語」と呼んで通常の正統フランス語と区別した。そして写本 fr.1116 を、その筆録者の言語が基本的かつ体系的に放棄されずに残っている唯一のものとした。この文体の一致からまた、かの旅行記はマルコの口述するがままに筆記されたとの従来の見方を否定し、かなり完成度の高い豊富なメモやノートに基づいて、作家ルスティケッロが明確な構想のもとに十分な時間を使って自分の文体で筆録して完成させたものであると考えた。

しかし、この F 稿本そのものは 14 世紀始めの数十年にイタリア（おそらくトスカナ地方）で作成されたものであり、誤り・崩れ・欠落・意味不明箇所等のあること、同系統の他の稿本により古い良好な形の語句や文が残っている場合のあることなどから、これをジェノヴァのオリジナルとみなすことはできず、それ以前の段階があり、その間には複数の中間写本が介在していたと考えなければならないとした。いずれにしてもしかし F は、少なくとも言語的には現存写本のうちオリジナルに最も近いものであることには変わりなく、全てのテキストの基礎となるものである。

内容的には全 233 章からなり、序文から最後のノガイとトクタイの戦いの章まで揃った完本で、A グループのテキストの中ではもっとも長くかつ豊かである。そのテキストとしては、前述ベネデットの校訂になる出版の他、1982 年にロンキによる独自の校訂版が刊行されている。また、1932 年のベネデット自身の手にな

るイタリア語集成訳<sup>6</sup>と1939年のムールの英語集成訳<sup>7</sup>でも主底本として用いられている。

この特徴的な言語の装いを残すものとしては他に唯一、大英博物館コットン手稿 Otho D.v. (O : 14 世紀末) のあることが知られる。わずか 2 葉にまたがる断簡で、序文第 1 章と第 20 章の他はその間の章が大きく短縮されて残っているに過ぎないが、F と同じフランク-イタリア語で記されており、F 以外の唯一の証言として、いくつかの個所で F の誤りや欠落を補う読みを提供する点で貢献する。

## 2) グレゴワール版 (FG)

残りのフランス語写本のうち 15 は、前述 F とははっきりと異なる通常の正統なフランス語で書かれており、そのうちの一つパリ国立図書館 Ms.fr.5631 (A<sup>1</sup> : 14 世紀後半) には最初に、「本書は私グレゴワールがマルク・ポール殿の書を作り直したものである」との一文があることから、グレゴワール版と総称される。構成と内容は F とよく一致し、その結構忠実な再生とあってよいことから、同じフランク-イタリア語で書かれていた F の兄弟写本の 1 本 (F<sup>1</sup>) がグレゴワールなる人物によって標準的なフランス語に書き直されたものと見られる。しかし、この人物については何も知られない。

ベルン市図書館 Ms.125 (B<sup>3</sup> : 15 世紀前半)、パリ国立図書館 Ms.fr.5649 (B<sup>4</sup> : 15 世紀中頃)、ジュネーヴ大学公共図書館 Ms.fr.154 (B<sup>5</sup> : 15 世紀) の 3 写本には同書の作成にまつわる声明文があり、そこには、原本はフランスの騎士ティボー・ド・セポワがヴェネツィアで直接マルコ・ポーロから進呈されたものであること、それは同書の作成後最初のコピーであること、さらにそれから作ったコピーをティボーの死後息子ジャンが主君シャルル・ド・ヴァロワや友人に配ったこと、1307 年 8 月に作られたことなどが記されてある。が、マルコから直接進呈されたかどうかは確認されないし、同書の最初のコピーであることもありえないと見られている。また上の日付も、ティボーが手に入れた元のコピーが作られた日付か、それともそれからグレゴワールが書き直した版の出来上がった日のものは確定しない。いずれにしてもそれから遠くない時期に作られたことになる。ベネデットは、1307 年 8 月の日付は元の写本のものであり、グレゴワールによるその訳は 1308 年と推定する<sup>8</sup>。

こうした由来の経緯から、この家族の写本はフランスで王侯貴族の間に広まり、華麗な細密画の挿絵の付いた豪華な羊皮紙写本が多い。またその共通するタイトルから、『驚異の書』Livre des Merveilles と呼び慣わされる。主要な写本として他に、パリ国立図書館 Ms.fr.2810 (A<sup>2</sup> : 15 世紀初頭)、パリ・アルスナル図書館 Ms.3511 (A<sup>3</sup> : 15 世紀末)、大英博物館王室写本 Ms.19D1 (B<sup>1</sup> : 14 世紀後半)、

オクスフォード・ボドリアン図書館ボドリアン写本 Ms.264 (B<sup>2</sup>: 14 世紀後半)、ストックホルム王立図書館 Ms.XXXVII (C<sup>1</sup>: 14 世紀前半)、パリ・アルスナル図書館 Ms.5219 (C<sup>3</sup>: 16 世紀) 等がある。

言語的には、標準語への書き直しであるためフランス語としてより純粋で適切な表現となっているが、ルスティケッロの言葉と文体を伝えず、その特徴的な言い回し、慣用句、場面進行の文句などが削除されたり通常のものに置き換えられたり、訳者すなわちグレゴワールにとって理解の困難だった箇所が短縮・削除されたり誤読されたりしている。しかし、時により正確な読み、より好ましいヴァリエーションを提供して、F の欠落や誤りを補うものとなっている。

構成上は、いずれも F の第 202～206 章で中断し、最後の 28 ないし 32 章分(中央・西アジアのモンゴル継承国家の歴史の部分)を欠く。しかし、その終わり方が唐突であることから、訳者や転記者の中断によるよりも落丁による可能性が高い。個々の部分では、恣意的な手直しや改変、記事の移動や省略も多い。

この FG テキストは、前述パリ国立図書館 Ms.fr.5631 を基本とし同 Ms.fr.2810 と Ms.fr.5649 を参照して 1865 年ポーチェによって刊行された。彼は上述の声明に絶対的な信頼を寄せ、「同書作成後最初のコピー」とあることから、ジェノヴァでルスティケッロによって書き取られたもの (F) は下書きであり、その出来具合に不満だったマルコが解放後ヴェネツィアで自ら良好なフランス語に書き直させた改訂版であると考えた。しかし、内容的に F に劣ること、共通の誤りと欠落のあること、F の言語が理解できなかつたがゆえと思われる誤りが散見されることなどから、この書き直しにマルコが直接関わっていたことは否定的である。ベネデットは、マルコから直接かどうかは分からないが、同書の一コピーを手に入れたティボーが、そのフランス語があまりにも奇妙なものであったことから、それを贈呈すべき相手の自分の主君シャルル・ド・ヴァロワら王侯貴族のことを慮って、おそらくフランスで誰か、つまりグレゴワールなる人物に通常 of 正統なフランス語に書き直させたものであろうと見る。

FG 稿本の一つ (A<sup>2</sup>) は、早く 1351 年にサン・ベルタン修道院のベネディクト会士ジャン・ル・ロン・ド・イプルによって編まれた東方旅行記集に収められた。1875 年のユールの英訳版はポーチェのテキストを基にしたものである。

### 3) トスカナ語版 (TA)

F 系 A グループに属するイタリア語写本は、いくつか孤立したものや後世の他版からの訳を除くと、トスカナ語版とヴェネト語版の二つの家族に分かれる。

古いトスカナ地方の方言で書かれた手稿本は、フィレンツェ国立図書館 Ms.II.IV.88 (TA<sup>1</sup>: 14 世紀前半)、同 Ms.II.IV.136 (TA<sup>2</sup>: 14 世紀)、同 Ms.II.II.61

(TA<sup>5</sup>: 1392 年)、パリ国立図書館 Ms.ital.434 (TA<sup>3</sup>: 14 世紀)、フィレンツェ・ラウレンツィアーナ図書館 Cod.Ashuburnhamiano 525 (TA<sup>4</sup>: 1391 年) の五つが知られる。TA<sup>1</sup> には、所有者ピエル・デル・リッチョによる 1452 年の書き込みがあり、「1309 年に死亡した母方の曾祖父ニコロ・オルマンニによってフィレンツェにて書かれた」と記されている。しかし、書き込みがかなり後年のものであること、その転記者についての確かな記録が何もないことなどから、同写本が 1309 年以前作かどうかは留保される。それにしても古い良好なトスカナ方言であることから、17 世紀にクルスカ科学アカデミーの『語彙集』に採録され、「クルスカ稿本」とか「オッティモ」*Ottimo* (最良) とも称される。

この写本のモノとしての古さや上のような事情から、原本のトスカナ語テキストはあるいはトスカナ地方ピーサの人であるルスティケッロのオリジナルだったのではないかと疑われたこともあったが、1827 年これを最初に刊行したバルデッリ・ボーニによって、意味が分からずしてそのまま書き写されているフランス語彙の多いこと、地名や数量の単位がフランス語のままであることなどから、フランス語写本からの訳であることが証明された。FG と同じく、時に F よりも古い良好な読みを残していること、F の誤りや欠落を補う場合もあることなどから、F に近いフランク・イタリア語で書かれた一本 (F<sup>2</sup>) からトスカナ方言に訳されたものと考えられる。

内容的には基本的に F とよく一致するが、歴史や軍事に関する章がいくつか見られないほか、全体的に縮約され分量的にかなり減少している。最後は F の第 227 章で終わっており、末尾の 7 章を欠く。代わってその後に、他版にはないまとめと結びの一文があり、世界諸地の事を述べ来たったがこれで本書を終わること、出立の後グラン・カーネのもとで過ごし数々の冒険の後ようやく祖国に戻ってきたこと、これほど広く世界を探索したものはマルコをおいて他にないことなどが書かれているが、これは訳者による最後のまとめと見なされる。訳は全体として忠実冷静であり、恣意的な展開や書き足しは少ない。しかし、個々の細部での省略・要約・短縮・変形、誤解や無理解から来る誤訳・不正確・意味のズレなどは数多い。

バルデッリ・ボーニの後、TA<sup>1</sup> はラザリ (1847 年)、バルトリ (1863 年)、オリヴィエーリ (1912 年)、チックート (1981 年)、ルッジェーリ (1986 年) らによって繰り返し出版された。TA<sup>1</sup> より古い読みを残していると見られる TA<sup>2</sup> が、1975 年ベルトルツィ・ピッツォルツィによって刊行されている。1982 年のロンキはその再版である。



1824年フランス地理学協会によってFの付録として刊行されたラテン語写本パリ国立図書館 Ms.lat.3195 (LT: 14世紀)は、このトスカナ語テキストがラテン語訳されて後述ピピーノのテキストと混交したものである。

14世紀後半のフィレンツェの詩人アントーニオ・プッチ(1388年没)の『覚え書き』*Zibaldone*(フィレンツェ、ラウレンツィアーナ図書館 Ms.Tempiano 2)中に、マルコ・ポーロ記の興味深い要約のあることが知られるが、地名の崩れ方や誤りが共通すること、同じ特徴的な語彙が使われていることなどから、その典拠はこのトスカナ語テキストであったと見られている。

#### 4) ヴェネト語版 (VA)

古いヴェネト地方の方言で書かれている手稿本のうち、Aグループに属するものとしては、ローマ・カサナテンセ図書館 Ms.3999 (VA<sup>1</sup>: 14世紀前半)、フィレンツェ・リッカルディアーナ図書館 Ms.1924 (VA<sup>2</sup>: 15世紀前半)、パドヴァ市図書館 Ms.CM211 (VA<sup>3</sup>: 1445年)、フィレンツェ個人蔵 (VA<sup>4</sup>: 15世紀前半)、ベルン市図書館 Ms.557 (VA<sup>5</sup>: 16世紀)の五つが知られる。

これらの中ではVA<sup>1</sup>が一番古く、読みも正確かつ保守的で、この家族の祖本の姿を最もよく伝えるものとみなされるが、8葉からなる断簡で30章(Fの37-69章)ばかりしか残っていない。他の4本はいずれもかなり後世(15~16世紀)のもので、言語的にも内容的にもかなりの変貌をきたしている。その中ではVA<sup>2</sup>が比較的正確かつ豊かであるが、最初と最後を欠くうえ、途中でも長い記事の省略や併合が行なわれている。36葉からなり、Fの第33-189章を収める。テキストがいちおう全体的に揃っているのはVA<sup>3</sup>とVA<sup>4</sup>で、VA<sup>3</sup>は72葉からなり、途中いくつかの欠落と省略はあるがFの第1-220章を収める。最後に転記者ヴィトゥーリ Vituriの結びと日付(1445年7月24日)がある。VA<sup>4</sup>のほうが古いが今は行方不明となっている。VA<sup>5</sup>はさらに後世のもので、欠落が多い。

マルコの故郷ヴェネト地方の方言で書かれているためオリジナルを疑われたこともあったが、1906年VA<sup>1</sup>を刊行したペラエズによって、それがフランス語テキストからの訳であることが証明された。しかし、TAと同じく時にFよりも古く良好な読みや語句を残していること、Fの誤りや欠落を補うことなどから、Fに近いフランク-イタリア語の一稿本(F<sup>3</sup>)からヴェネト語に訳されたと考えられる。

内容的には、最後の部分でアジアのモンゴル国家の歴史の章(Fの200-217, 221-234)をそっくり欠き、ロシアなど北方地方の章(Fの218-220)のみを保つ。それ以前の部分でも8章を欠く。記事の順序の入れ替えや章の合併も多い。



しかしこの版は、次のピピーノのラテン語版はじめいくつかの言語に転訳され、東方との商業上の結びつきが強く、また出版活動も盛んだったヴェネツィアで 15 世紀末から繰り返し刊行されることによって、歴史的には最も広範で息の長い影響を及ぼしたことで貴重である。

VA からのラテン語訳はピピーノ版のほかにもう一つ (LB) あり、アンブロジーアーナ図書館 Ms.X.12.P.S. (14 世紀前半) とヴァティカン図書館ヴァティカン写本 Lat.2035 の 2 写本が残っているが、どちらも要約か断片である。TB と略称されるトスカナ語版は VA からの訳であり、フィレンツェ国立図書館パラティーノ写本 Ms.590 (TB<sup>1</sup> : 14 世紀後半)、ヴァティカン図書館キジャーノ写本 Ms.M.VI.140 (TB<sup>2</sup> : 15 世紀) ら 6 本が知られる。いずれも 14 世紀後半から 15 世紀のもので、訳は忠実でなく要約であるが、VA に特徴的な語句・表現・誤りを共有する。

ミュンヘン図書館の二つのドイツ語写本 Cod.696 と Cod.252 (D) はこの TB からのドイツ語訳であり、マルコの書の最も古い印刷本として知られる 1477 年 (ニュルンベルグ) と 1481 年 (アウグスベルグ) のドイツ語刊本は、それに近いドイツ語写本からと見られる。さらに、「様々な習俗と人々の書」Liber de morum et gentium varietatibus との共通のタイトルで知られるヴァティカン図書館バルヴェリアーノ写本 Lat.2687 (15 世紀前半) ら五つのラテン語写本も、VA のトスカナ語訳 (TB) かそのドイツ語訳 (D) からのラテン語訳 (LA) である。アメリーゴ・ヴェスプッチの記録で知られるリッカルディアーナ図書館ヴァリエンティ写本 Ms.1910 は、さらにこのラテン語訳からのトスカナ語訳である。

その他、「1465 年 3 月 12 日ダニエロ・ダ・ヴェローナにより」との書き込みのあるルッカ国立図書館ヴェネト語写本 Ms.1296 と、フィレンツェのマルチェッリーナ図書館に所蔵されているスペイン語印刷本 (1518 年 5 月 16 日セヴィリヤ) のサンタエリヤによるカスティリア語訳テキストも VA からのもので、同一の稿本に基づいている。

VA の印刷本は、1496 年のジャン・バッティスタ・ダ・セッサによるものに始まり、その後も 17 世紀末にいたるまで繰り返し出版された。しかしそのテキストは、最初にオドリーコ・ダ・ポルデノーネの東方旅行記の第 1 章が置かれ、マルコの旅行記は F の第 8 章に当たる箇所から始まるという奇妙な形になっていることをはじめ、誤り・省略・短縮・書き換えも極めて多く、通俗的な娯楽本の類であった。近代に入って 20 世紀始め (1906 年)、前述ペラエズによってようやく VA<sup>1</sup> が刊行された。VA<sup>3</sup> は、1999 年バルビエーリとアンドレオーセによって出版され、また 2000 年タカタによって印刷されている。

## 5) ピピーノのラテン語版 (P)

ラテン語写本は、前述の俗語からのいくつかの翻訳と B グループのセラダ手稿 (Z) を除くとほぼ全て、ボローニアのドメニコ会修道士フランチェスコ・ピピーノによるラテン語訳 (P) に由来する。マルコ・ポーロ写本の中では最も数多く残っているもので、約半数を占める。その多くは、要約されたり省略されたりして全体の一部しか保っていないが、比較的よく揃った古い良好なテキストの手稿本としては、ベルリン国家図書館 Ms.lat.968 (P<sup>2</sup> : 14 世紀)、フィレンツェ・リッカルディアーナ図書館 Ms.Riccardiano 983+2992 (P<sup>9</sup> : 14 世紀前半)、モデナ・エステンセ図書館 Cod.estense lat.131 (P<sup>24</sup> : 14 世紀前半)、パリ国立図書館 Nouv.Acq.lat.1768 (P<sup>32</sup> : 14 世紀前半)、ローマ・ヴァティカン図書館 Ms.Vat.lat.3153 (P<sup>38</sup> : 14 世紀) 等がある。

最初に、ルスティケッロの序章にかえてピピーノ自らの「序文」があり、同書の翻訳を引き受けるに至った経緯やラテン語訳の意義と目的が述べられる。その中に翻訳は上司から命じられたことが記されており、ボローニアでのドメニコ会総会は 1302 年と 1315 年に開かれていること、同修道士に関する記録の最後が 1321 年のものであることなどから、訳はその間に行なわれたことが推定される。また、同序文でマルコ自身と叔父マフェオの死 (1310 年) のことが触れられており、ピピーノはポーロ家と面識があったかそれに近い関係だったことが推測される。

写本の一つモデナ・エステンセ図書館 Cod.X.I.5 (P<sup>25</sup> : 14 世紀前半) 中に、「ロンバルディア俗語から」訳したと記されていることから、典拠はまず確実にヴェネト語テキスト (VA) だったと考えられる。構成と内容もよく一致し、最後のアジア史の部を欠くこともそれを証している。しかし、今に残る VA 稿本のテキストと比べて、誤りはより少なくまたより古く良好な読みを残していることから、この訳者が基にした稿本は今に残る VA の前述諸写本より良好なものであったとみられる。

ピピーノには他に長編の世界史『年代記』*Chronicon* があり、その中にもマルコの書からの記事が転載されているが、それらは現存 P 稿本に見られる簡潔なものとは異なり、より忠実・詳細であることから、今に伝えられる P は最初の形ではなく、オリジナルはさらに正確で豊かなものであったことが推定される。

事実、F と比べると現 P テキストは、前述の章の欠落のほか、全体的にかなり大きく縮約されて短くなっており、分量的にも主要テキストの中で最も少ない。その訳は、基本的には原典に沿っているが、全体として自分の言葉で書き直されており、小さな加筆や修辭的な手直しもあることが指摘される。また、修道士という立場やその翻訳の目的からして、とりわけ信仰に係わる箇所において行き過

ぎた介入のあることが明らかである。3 卷への分割（I：67 章、F の第 75 章まで、II：70 章、F の第 158 章まで、III：50 章、F の第 159-194、218-220 章）は、F 系グループではピピーノ版のみの特徴である。

P テキストからの俗語訳写本がいくつかあり、フランス語（2）、アイルランド語、ボヘミア語、ヴェネト語、フェルナンデスによるポルトガル語（1502 年リスボン刊）、シモン・シュヴァルツによるドイツ語（1582 年刊）を数える。このうちボヘミア語訳（プラハ博物館 Cod.III.E.42、15 世紀）は今に伝わる P 稿本より内容的に豊かで詳しく、これまた現存テキストが原初の形より要約的であることを示すものとなっている。

さらにまた多くの印刷本があり、最初は 1485 年アントワープで出版されたもので、コロンブスはその一本を航海に携えたことで知られるが、内容的には誤りが多い。これの原本は、1949 年岩村によって日本の国会図書館から復刻出版された。次いで 1532 年バーゼルでグリナエウス（実質的にはヨハン・フッティヒ）による『新世界』*Novus Orbis* 中に収録されて大きな成功を収めた。しかし、これらの刊本に用いられたテキストがどの写本のものであるかは特定されず、崩れた形を示していることからかなり後世のものと考えられる。その上、編者による手直しが目立つ。グリナエウス版はその後何度も再版され、1585 年と 1602 年のライネック版、1671 年のミュラー版でさらに広まった。

このグリナエウスの印刷本からの俗語訳としては、ドイツ語（1534 年）、オランダ語（1563 年）、フランス語（1556 年）、カスティリア語（1601 年）、フランス語（1735 年）等がある。

## 6) ラムージョのイタリア語版 (R)

1559 年ヴェネツィアで出版されたジャンバッティスタ・ラムージョ（1485 - 1557 年）の『航海旅行記』*Navigazioni e Viaggi* 第 2 卷に、彼自身の手になるイタリア語集成訳が収められた。3 卷に分かたれていること、章の欠落を同じくすること、加筆や誤りを共有することなどから、主底本は P と考えられるが、それには見られない例えば名高いアフマド事件（1282 年）やキンサイ（杭州）の詳細な描写など、数多くの興味深い記事を含んでいた。そのテキストに前置された長い解説の中でラムージョは、「150 年以上も前に書かれた数種の写本」に基づいてマルコの書を訂正したこと、その一つラテン語写本は友人のギジ家から借りたものであることを記していた。彼はまた、そのラテン語テキストをジェノヴァでマルコ自身によって書かれたオリジナルと考えていた。

このラムージョのテキストはイタリア語ということもあって、広く普及していたピピーノ版の前に長らく等閑視されてきたが、19 世紀に入ってようやく見直さ

れる。まずレッシングによってその重要性が指摘され、1818年にはマースドゥンが「内容的にはるかに豊かである」という理由で、その英訳の底本にこれを選んだ。トスカナ語テキスト (TA<sup>1</sup>) を出版した前述バルデッリ・ボーニも、同じ理由からその第 2 巻にこれを採録した。1875 年のユールも、ポーチェのテキスト (FG) にはない記事をラムージオからとって付録とし、ラムージオが用いたというギジ家稿本の発見が急務であることを指摘した。また、それまでラムージオ自身による捏造か近代の旅行者から借用したものであろうと疑いの目で見られてきたそれら独自記事を、詳細正確で史実と合致するものが多いことからマルコ自身の手になるものと確信し、ジェノヴァからの解放後ヴェネツィアで書き加えたものが後に集められてラテン語に訳されたのであろうとみなした。

それまでにも、トレドの司教座聖堂古文書庫にゼラダ手稿と呼ばれるラテン語写本が存在し、そのテキストは書き出しが P とは異なり F に近いものであることが前述バルデッリ・ボーニによって 1827 年に報告されていたが、それ以上のことは知られなかった。1924 年ベネデットはミラノのアンブロジアーナ図書館に、ジュゼッペ・トアルドによって 1795 年に作られたその忠実な模写 (Ms.Y.160.P.S.) を発見し、そこにはラムージオの新記事の大部分が見出されるのみならず、R にもないさらに新たな記事が多数含まれていることを明らかにした。また、ラムージオが用いたというギジ家稿本 (Z<sup>1</sup>) がその模写の原本であるセラダ稿本 (Z) の兄弟写本に間違いのないことを確認した。そして 1928 年の前述彼自身の校訂になる F テキストの脚注に、そのセラダ稿本 (トアルドの模写) とラムージオテキストから F にない記事を全て補って出版した。

ベネデットによれば、R にはギジ家稿本以外に、いずれも同じ系統に属する後述ソランツォ手稿 (V) とフェッラーラ要約 (L)、それに VA とは異なるもう一つのヴェネト語テキスト (VB) が用いられている。したがって R は、P を基本としその枠の中にギジ家稿本はじめこれらの稿本から P にはない新たな記事を取り込むことによって、そのテキストを内容的にはるかに豊かなものとする一方、おびただしい誤りのみならず恣意的な書き換えの多い最も崩れたテキストである VB を無批判に用いることによって、正確さと統一を欠くものとなっている。またラムージオ自身による加筆や手直し、それに訳文も集成訳であるため忠実とは言えず、自らの言葉で書き換えられているものが多い。

テキストに前置されているラムージオの三つの序文、とりわけその第一「偉大なるマルコ・ポーロ殿の書の冒頭の部分について」は、この旅行家についての多くの貴重な情報を含み、その後の全ての伝記研究の出発点をなしている<sup>9</sup>。テキストは、近年では 1980 年ミラネージによって再刊された『航海旅行記』第 3 巻に収録されている。

## 7) セラダ手稿 (Z)

1932年、セラダ手稿の原写本 (Z) がパーシヴァル・デーヴィッドによって上述トレドの大聖堂古文書庫に発見され、1938年ムールによってそのテキストが刊行された。それを、先に自分が発見した前述アンブロジャーナ図書館の模写と対校したベネデットは、その異なりはごくわずかなものでしかなく、したがってセラダ稿本についての判断とマルコ・ポーロテキストに関する自分の説にはなんら変更すべき点はないとする<sup>10</sup>。

Zは、ローマにあったスペインのセラダ枢機卿 (1717 - 1801) の蔵書からトレドの司教座聖堂に移籍された紙写本で、それ自体の作成は15世紀後半、1470年頃と推定される。そのラテン語訳がいつ誰によって行なわれたかは一切不明だが、文体も内容もFとよく一致することからして、Fに近いフランク-イタリア語版の忠実なラテン語訳とみられる。しかも、Fが誤っており他の版が正しい場合Zはその正しい方と一致することの多いこと、Fの疑問箇所や崩れた箇所がZで訂正できること、人名・地名がより正しく保たれていることなどから、Fよりも古くよりオリジナルに近い良好な稿本に基づいたことが推定される。訳者については、口蓋音gやcの代わりにzが用いられていること、マルコが Marcus Paulo と常に公式名で呼ばれていることなどから、ヴェネト人の可能性が高いとベネデットは推測する。

しかしその訳は、少なくとも現セラダ稿本では全般に及んでいず、とりわけ前半で省略と短縮が多い。最初の旅の経緯を述べた19章からなる序の部分はずか数行に縮められ、「以下省略する」と明記されている。その後の章でも省略する場合は etc と記される。この省略が最初の訳者によるものか、それとも後の転記者によるものかは断定できないが、省略部分の前後で話の筋が通らない場合のあることなどから、最初は全訳だったのが後の写字生によって縮約された可能性が高いとみられる。一方、後半148章以降は全般にわたってFと同じ順序で訳されており、その訳はきわめて忠実であり、文体的にもよく一致する。

内容的には、Fと共通する記事においても時により豊かかつ詳細であり、その上Fにない記事や文章が長短あわせて200箇所以上ある。その中には、従来マルコの旅を疑う理由の一つとなっていたF系テキストに欠落している記事、カラ・ホトの描写、古い中国文明への言及、女性の「百合の足」(纏足)、あるいは福州のキリスト教徒(マニ教徒)の存在などが見られる。その5分の3はラムージョのテキストにも見出されるが、残りはZにしか見られない。一方、例えば著名なアフマド事件のようなRのみであってZにない箇所は、Zでは前半省略が多いことからして、Zの典拠か原本にはあった可能性が高いと見られる。

F系グループ (A) のテキストになく Z (と R) にのみ見出される記事をいくつか共有することと、F に対して典型的に異なる読みを同じくすることなどから、この Z系グループ (B) に属せしめられるテキストが他に三つある。

一つは、ソランツォ手稿 (V) と呼ばれるベルリン図書館ハミルトン写本 Ms.424a (15 世紀) で、ヴェネト方言で書かれたテキストである。言語的にも内容的にもかなり崩れているが、F の第 1-219 章に規則的に対応し、Z の新記事を 22 箇所まで共有するのみならず、F にも Z にもない箇所を 30 近く有する。したがってこれをベネデットは、F に似たフランク-イタリア語テキストのラテン語訳からのヴェネト語訳か、それともそれらの混成訳であろうと推定する。

もう一つは、フェッラーラ要約 (L) と通称されるフェッラーラ図書館 Ms.Cl.II.336 (15 世紀始め) に代表される四つのラテン語写本で、F の第 1 - 226 章が忠実に要約されている。要約者が理解できずしてフランス語がそのまま残っている表現のあることなどから、F に極めて近いフランク-イタリア語版にのってラテン語に要約されたものと考えられる。内容的には、F になく Z・R・V と共通する記事を有するほか、これのみの記述も 13 箇所に及ぶ。R にはこれら V や L とのみ共通する箇所のあることから、ラムージオがこれらを典拠の一つとして用いたことが推定される。

さらにもう一つは、ヴェネツィアのコッレル図書館 Ms.Donà delle Rose 224 (1446 年 9 月 28 日) ら 3 写本に残るもう一種のヴェネト語テキスト (VB) で、いずれも 15 世紀の作である。F の言葉がそのまま残っている箇所のあること、誤りを F と共有することなどから、典拠は F に近いフランク-イタリア語版だったと見られる。しかし、F になく Z 独自の記事を 2 箇所に留めていることから、その典拠は F よりも Z のそれに近いものであったろうと推定される。もともと、内容的にはその忠実な訳からは程遠く、翻訳というよりは自由な書き換えとも呼ぶべきものとなっている。R には、上述のごとくこれから多くの箇所が採り入れられていることが跡付けられる。

Z のテキストは、上述ムールによるものの他、1998 年バルビエーリによってイタリア語の対訳を付けて出版された。

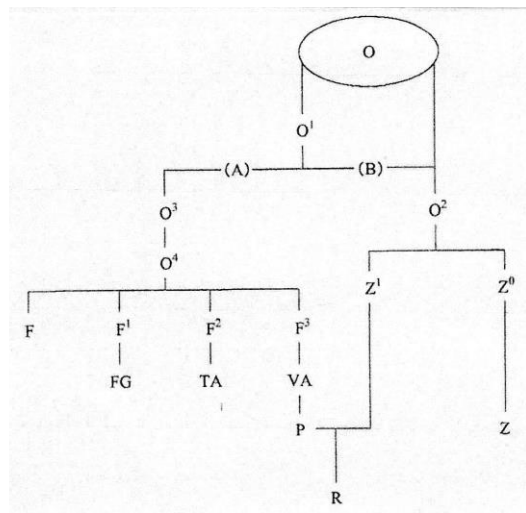
## 8) その他

マルコがジェノヴァとの海戦で捕虜になったとの情報が記載されていることで知られるヤコポ・ダックィの『世界の姿あるいは年代記』*Imago Mundi seu Chronica* には、その後に 21 章からなるマルコの書の抜粋「ほとんど信じ難い事ども」(I) が続く。そのうち後半の 12 章は LB (VA のラテン語訳) からの全くの要約であるが、前半の 9 章には処女性の特徴としての全裸、母系制、聖職者の

初夜権、多妻制など、今に伝わるテキストにはないきわめて興味深い記事が見られる。ベネデットは、これらがマルコの手になるものかは判定しがたいが、きわどい内容の記事であることから、宗教的配慮から削除されるとすればまずこのような性質のものではなかったろうかと疑う。そして、ヤコポの書が書かれたのが1340年代であることから、マルコのオリジナルには今に伝わるどの稿本にも見られぬような記事の含まれていた可能性を指摘する。

その他、以上の七つのグループのどれにも確実に分類できないものとして、1. カタロニア語版 (K) とそのフランス語訳 (K<sup>1</sup>) ならびにアラゴン方言訳 (K<sup>2</sup>) の家族、2. ダンテ『神曲』の一写本に書き込まれているメオ・チェッフオーニの抜粋 (1430-31年)、3. マルコから直接話を聞いて書いたというピエトロ・ダーバノの「哲学者ことに医学者の相違調停者」*Conciliator differentiarum philosophorum precipueque medicorum* (1303年) 中の記事、が挙げられる。

以上、主要テキストの系譜関係を簡単に図示すると以下のごとくになるろうか。



O は、ポーロの話、メモ・ノート、持ち帰った書き物、ルスティケッロの許にあった書や情報、その他祖本の材料となった全ての原資料、O<sup>1</sup>はマルコとルスティケッロによって編まれた原本、Z<sup>0</sup>はZの祖本、Z<sup>1</sup>はギジ写本、とする。



## 2 写本・テキストの対校

### 2.1 「歴代カアン」(第 69 章) 3\*

上に述べた七つの家族から代表的写本・刊本の同一箇所を取り上げて対校する。まず、第 69 章「チンギス・カアンの死後統治したカンについて述べる」冒頭の歴代グラン・カアンについて記事である<sup>11</sup>。(欧文イタリック体と和文斜字体は F と他の版との異なりを、[ ]内は刊行本の校訂を示す。)

1) F : Bibl. Nationale de France, Ms.fr.1116, ff. 27r.b31~28r.a13.<sup>12</sup>

Sachie tuti voiramant que apres cinchins<sup>1</sup> can fui seingnor<sup>2</sup> cui can, le tierçe bacui<sup>3</sup> chan, le quart alton<sup>4</sup> can, le quint mongu chan, le sexme cublai can, qui est le greingnor e le plus poisant que nei<sup>5</sup> fu nul des autres, car tuit les autres cinq fuissent ensemble ne auront tant de poir<sup>6</sup> cum cestui cublai. Et encore voç di *greingnor cose que le ie<sup>7</sup> voç di* que tuit les enperaor dou monde et tous les rois de cristiens et de saraçin ne aont<sup>8</sup> tant poir<sup>6</sup> ne poroient il fair tant come cestui cublai grant chan poroit il fair, et ce vos mostrerai en nostre livre tout apertamant.

[ Benedetto: 1 Cinghis 2 seignor 3 Batui 4 Oktai 5 ne 6 pooir 7 je 8 aront ]<sup>13</sup>

皆さん本当にご存じありがたいが、チンギス・カンの後クイ・カンが君主となり、三代目はバクイ・カン、四代目アルトン・カン、五代目モング・カン、六代目がクブライ・カンであり、彼は他の誰がそうであったよりも偉大で強力である。というのも、他の五人が皆一緒になっても、このクブライほどの力は有さないだろうから。また、今私が皆さんに述べているよりも偉大なこととお話しよう。すなわち、この世の全ての皇帝もキリスト教徒であれサラセン人であれ全ての王もかほどの力を持っていなければ、このグランカン・クブライができるほどのことをすることもできないであろう。で、私はそのことを本書において皆さんにすっかり明らかにするだろう。

ベネデットがフランク-イタリア語と呼ぶ、きわめてイタリア語がかったルステイケッロの独特のフランス語とはどのようなものなのか、このわずかな行にもよくうかがうことができよう。

標準フランス語との対照は次の FG に委ねることにして、いくつかの語のイタリア語形を挙げる : tuti/tuit – tutti <皆>、voiramant – veramente <本当に>、seingnor – signor <君主>、fu/fui – fu <であった>、cum/come – come <のように>、ie – io <私>、enperaor – imperator <皇帝>、nostre – nostro <我々の>、

apertamant – apertamente<はつきりと>等。その最たるものが couse<こと>で、イタリア語 cosa とフランス語 chose の混交したもの。greingnor は grant の比較級古形 greignor からである。

名詞・形容詞・冠詞等の性数の変化や動詞の活用も一定せず、また通常の規則から外れる：tuti – tuit – tous – tout、fui – fu、auront – aont 等。これらおよび他の文法上の誤りや適正さを欠く語句がどのように訂正されるかは、次の FG に見られる。

これらは、ルスティケッロの不完全なフランス語の知識のせいのみではなく、実際の発音に近い語形となっており、ジェノヴァの獄でのマルコとの共同作業がどのようなものであったかを想像させる。文体にもそれはうかがえ、作者（ルスティケッロあるいはマルコ）が読者に語りかける形をとっており、例えばこの sachie que<ご存じありたい／いいですか>や voç di<皆さんにお話しすると／と言おう>は全編にわたって常に用いられる他、この箇所には現れないが、e que voç en diroie?<で何を言おうか／でどうなったか>、e porcoi voç firoie lonc cont ?<どうして長話をしているのだろう／長話はさておき>といった、話の進行のための冗句や強調表現が頻出する。こうした語句が、他の版では当然ながら徐々に省かれ整理されてゆくことは、これから見られる。

歴代カアンについては、初代チンギス・カンの後クイ（クユク）を第 2 代とし、バトゥをその中に数え、アルトン（フラグ）を第 4 代とする誤りが注目される。歴史に関するこうした誤りは他にも多く、もしこれがポーロによるものなら、自分の主君の直接の系譜に関わるものだけに、17 年にわたってその側に仕えて重用されたとの自称に疑いの目を向けさせる根拠となる。

名前は、チンギスはここでは cinchins/cinghuis であるが、他の箇所では cinchis, cinghins, cingin, cingins, cinghis 等様々に綴られ一定しない。cui はクユク Cuyuc/Kuyuk の末尾の子音 c/k が落ちた形である。元史の貴由 Kui-yu と一致する。bacui はバトゥ Batu のことであるが、写本では c と t は同じように書かれ判別しがたいことが多いところからくる。alton は他版では alau/allau<フラグ>かそれに類する形になっている。ベネデットはこれの t に注目し、原本では第 2 代のカアン‘オゴタイ’の名があったであろうが、allau がそれまでに 2 度出てきているため、それに引かれて写字生が書き換えたのであろうと考えて、Oktai と校訂する。が、音も綴りもかけ離れていること、第 4 代に置かれていることからしてもいささか無理であろう。alton は、allau の l を t、au を on に誤読した形で、やはりフラグのことである。ちなみにオゴタイは同書では一度も登場しない。

2) FG (FA<sup>1</sup>) : Bibl. Nationale de France, Ms. fr. 5631, f. 23v.a2-22.<sup>14</sup>

Sachiez tout vraiment que apres cinguins kaam<sup>1</sup> *qui fu leur premier seigneur regna* Cuy k., et le tiers bach<sup>2</sup> k., et le quart alaton<sup>3</sup> k., le quint mongu k., le sisiesme est Cublay k., *qui est seigneur et le plus puissant des autres v qui furent auant de lui*. Car se touz les autres v feussent ensamble ne auroient il tant de povoir comme cestui a. Encor vous di plus que se tuit li *crestien* du monde leur empereoures et leur roys feussent ensemble des crestiens et des sarrazin<sup>z</sup> n'auroient il tant de povair ne ne porroient tant fere comme cestui Cublay porroit, *le quel est seigneur de touz les tatars du monde, et de ceus de levant et de ceus de ponent, car tuit sont si<sup>4</sup> homme<sup>5</sup> et subgez a lui*. Et ce *grant pooir* vous monstrerai ie<sup>6</sup> en ce notre livre tout appertement.

[ Pauthier: 1 kaan 2 Batuy 3 Alacou 4 ses 5 hommes 6 je ]<sup>15</sup>

皆さん本当にご存じありがたいが、彼らの最初の君主であったチングィンズ・カアンの後、クイ・カアンが統治し、三代目はバク・カアン、四代目アラトン・カアン、五代目モング・カアン、六代目が今の君主であるクブライ・カアンで、その前に君主であった他の五人より強力である。というのも、他の五人が一緒になっても、彼が有しているほどの力をもっていなかっただろうからである。さらにまた皆さんにお話すると、たとえこの世の全てのキリスト教徒、キリスト教徒であれサラセン人であれその皇帝と王を合わせても、それほどの力をもっていなければ、このクブライができるほどのことはできないであろう。彼はこの世の全タタール人、東のタタール人と西のタタール人の君主である。というのも、彼らは皆その民であり、彼に服しているからである。で、その偉大な力を私は本書において皆さんにすっかり明らかにするだろう。

ルスティケッロのフランス語の語彙・語形・表現の訂正はほぼ全体に及んでいる : sachie→sachiez, tuti→tout, voiramant→vraiment, fui→fu, seingnor→seigneur, sexme→sisiesme, poire→pouvoir, cum→comme, dou→du, voç→vous, nostre→notre 等。greingnor は誤読されたのか、最初の方は seigneur<君主>に変えられた。次の、F et encore voç di greingnor couse que le ie voç di<さらに私が今述べているよりも偉大なことを皆さんにお話しよう>という奇妙な冗長な文は、encore vous di plus<またさらにお話しすると>と整理されている。また、comme cestui a と動詞 a が、que se tuit li crestien du monde ... と接続詞 se が、vous monstrerai ie と主語 ie(je)が補われて、文法的により適った文となっている。

書き換えはこうした言葉の訂正にとどまらず内容にまで及んでおり、*qui fu leur premier seigneur*<彼らの最初の君主であった>、*qui est seigneur*<今の君

主である>、*qui furent auant de lui*<彼の前に君主であった>といった小さな補足から、*le quel est seigneur de touz les tatars du monde…subgez a lui*<彼はこの世の全タルタル人…服しているからである>のごとき新たな一文まである。とりわけこの最後の文は、原本にあったのが F で省かれたのかそれとも FG の訳者か転記者によって書き加えられたのか、判断しがたい。しかしこの場合は、FG にしかないこと、既出の知識に属する内容補足的な性格のものであることなどからして、オリジナルにあったよりは後世おそらく訳者グレゴワールの加筆が疑われる。

一方、F にあって省略されているものは上の *greingnor cose que le ie voç di* 以外にない。これは他のどの版でも省かれる。*tuit li crestien du monde*<この世の全てのキリスト教徒>は、後ろとうまく繋がらないこと、後で *crestiens* が繰り返されていること、F にはないことなどからして、転記時の何らかの混乱が推測される。

カアンの名では、F の *batui* が *bach*、*alton* が *alaton* とさらに崩れている。しかし、*can*<カン>ではなく *kaam* (*kaan*) <カアン>、*tartars*<タルタル人>ではなく *tatars*<タタール人>となっているのが注目される。

カアンは古くテュルク・モンゴル系遊牧民の君主が名乗った称号カガン *qayan* (可汗) に由来するが、後に最高君主を指すカアンとより低い君主・首長を指すカン (汗) とに分かれ、モンゴル帝国を建てたチンギスも一部族の長であったためカンであったが、第 2 代のオゴタイからは最高君主 (皇帝) としてカアンと呼ばれた。モンゴル帝国の歴代の大君を挙げるここは、カアンが相応しい。もっとも、他の箇所では F でも *caan/chan* 等の形が使われていることからして、そうした区別が意識されていたかは疑問である。また、西のモンゴル諸国家では君主にカンが使われており、ここではバトゥやフラグが歴代の中に数えられていることから見ても、カンとカアンそれにグラン・カン (大汗) の呼称の混在が、彼らの系譜の混乱の一因であったであろうことは想像に難くない。

タタール *Tatar* とは、もとは中央アジアのテュルク系諸部族が東のモンゴル系遊牧民を呼んだ語であったが、テュルク系と西で接するルーシ諸国家に取りも入れられ、1237 年のバトゥの征西で襲来したモンゴル人全体を彼らはその名で呼んだ。それがヨーロッパにも伝わっていたが、続いて 1240 年頃そこから東欧辺境に突如として姿を現したモンゴル人を、イギリスの年代記作者マシュー・パリスは、その名の似かよりと恐ろしさから、ギリシャ神話の地獄の民タルタロス *Tartaros* になぞらえてタルタル人 *Tartars* 呼んだ。そしてそれが、そのままヨーロッパで通称として定着した。もっとも、同写本でもこの辺りでは *tatars* であるが、他の箇所では *tartars* の形も混在しており、これもその違いが理解されてい

たかは疑わしく、意図せざる誤記によるものかもしれない。もう一つの FG 写本 Ms.fr.2810 (A<sup>2</sup>)ではここでも *tartars* である。最後の、タルタル人には東と西の二つの国があり、それぞれペルシャとロシアのモンゴル国家を指すことは先行の章に語られており、これは後の補足が疑われる。

3) TA<sup>1</sup>: Bibl. Naz. Centr. di Firenze, Ms. II.IV.88, f. 22v.7-13.<sup>16</sup>

Sappiate veramente che a presso Cinghy<sup>1</sup> chane fu Cin<sup>2</sup> chane, lo terzo bacchia, lo quartoalcon, lo quinto mogui, lo sesto Cablau; et<sup>3</sup> questi a<sup>4</sup> piu podere: che sse<sup>5</sup> tutti gli altri fossoro insieme non potrebbono avere tanto podere quanto a<sup>4</sup> questo da sezzo *che oggi ae<sup>6</sup> nome gran chane*, <sup>7</sup> *cioe* Cablau. Et dicovi piu, che se tutti li singniori<sup>8</sup> del mondo, cristiani et saracini, fossoro insieme, non potrebbono fare quanto farebbe Chablau chane.

[ Ruggieri: 1 Cinghys 2 Cui 3 e 4 ha 5 se 6 hae 7 <e> 8 signori ]<sup>17</sup>

本当にご存じありがたいが、チンギ・カーネの後チン・カーネ、三代目はバッキア、四代目アルコン、五代目モグイ、六代目がカブラウだった。そして、この者はより力を有している。というのも、他の皆が一緒になっても、今日グラン・カーネという名のこの最後の者、つまりカブラウが有しているほどの力は持てないだろうからである。さらに皆さんにお話すると、キリスト教徒であれサラセン人であれこの世の全ての君主が皆一緒になっても、カブラウ・カーネがするほどのことはできないだろう。

訳として素直であるが、要約とまで至らないにしても全体的に縮約されて短くなっているのが分かる。FG に省略が一箇所しかなかったのに対して、ここではその他 *tuti, le greingnor, que ne fu nul des autres* が省かれ、*tuit les enperaor dou monde et tous les rois* は *tutti li singniori<sup>6</sup> del mondo* <世界の全君主>と一まとめにされている。さらには最後の、*et ce vos mostrerai en nostre livre tout apertamant* <そのことを本書で明らかにする>との文も省かれている。

一方、加筆は一切ない。唯一 *che oggi ae nome gran cane* <今日グラン・カーネという名の>が、若干表現を変えて位置を移動させられているのみである。

語彙・文法は後に標準語となるトスカナ語で、*da sezzo* <最後の>のみが近代語では用いられない。*podere* (*potere*), *fossono* (*fossero*), *potrebbono* (*potrebbero*), *ae* (*ha*)に古い形を残している。

カアンの名は、F に対して *cinchins*→*Cinghy*, *cui*→*Cin*, *batui*→*bacchia*, *alton*→*alcon*, *mongu*→*mogui*, *cublai*→*Cablau* と全て変形している。ただしこの写本でも、*Cin* と *Cui*, *alton* と *alcon* は判別しがたく、どちらとも読める。また

can が cane とイタリア語化している。これらの崩れ方からしていくつかの中間写本の介在が推測され、1309 年以前の転写との TA<sup>1</sup>の覚え書きは留保とともに受け取られる。

4) VA<sup>3</sup> : Bibl. Civica di Padova, Ms. CM 211, f. 24v.24-31.<sup>18</sup>

Dapuo *la morte de chinchis fo segnior di<sup>1</sup> tartari chui chaam, lo terzo segnior ave nome Bachui chaam, lo quarto <sup>2</sup> e llo quinto mongu chaam, lo sexto chublai chaam, el qual regnia mo<sup>3</sup>, e questo sollo a plui posanza che non ave tuti i altri zinque. E sapiate per zerto che tuti l'inperatori e re de cristiani e de saraini nonn a tanta posanza ni chusi grande signioria<sup>4</sup> dentro tuti chusi chome a Chublai solo. E questo ve mostrera el nostro libro veramente.*

[ Barbieri: 1 d'i 2 <...> 3 mo' 4 signioria ]<sup>19</sup>

キンキス・カアンの死後クイ・カアンがタルタル人の君主となり、三代目の君主はバクィ・カアンという名で、四代目、五代目モング・カアン、六代目が現在統べているクブライ・カアンで、この者だけで他の五人全部が持っていたよりも大きな力を有している。またしかとご存じありたいが、キリスト教徒とサラセン人の全ての皇帝と王を皆合わせても、クブライ一人がもっているほどの力も支配地もっていない。このことは、本書が皆さんに本当にお示しするだろう。

全体的に簡略化されて短くなっている点では、TA についてと同じことが言える。FG と TA では残っていた F の冒頭の *sachie tuti voiramant* <ご存じありたい> がこの版からなくなっている他、*car tuit les autres cinq ..... cum cestui Cublai; greingnor couse que le ie voç di; ne poroient il fair; tout apertamant* 等、繰り返しや説明の語句はここでも省かれている。

一方 TA には一切なかったのに対して、ここでは小さな追加と書き換えが認められる：*la morte de* <の死> 後、*di tartari* <タルタル人の>、*segnior ave nome* <君主は...という名>、*el qual regnia mo* <現在統べている>、*solo* <一人>、*per zerto* <しかと> である。これらは FG と共通するものが多いことからして、VA の祖本(F<sup>3</sup>)は F よりも FG のそれ(F<sup>1</sup>)に近かったのではないかと推測される。can ではなく caan/caan も FG と共通する。ただし FG の *tatars* はなく、*tartars* の通称が使われている。名前も *chinchis*, *chui*, *bachui* は FG と近く、TA よりは良好である。4 代目の名が抜けていることが注目され、他の版の例と合わせても、この名前には何らかの問題があったことをうかがわせる。

VA のヴェネト方言の語彙・語形に対してその TA の対応語（または標準形）を示す：dapuo – apresso, fo – fu, ave – ebbe, sexto – sesto, mo – adesso, sollo – solo, plui – piu, saraini – saraceni, ano – hanno, tuti – tutti, zinque – cinque, zerto – certo, chusi – cosi 等。

5 ) P<sup>9</sup> : Bibl. Riccardiana di Firenze, Ms. Riccardiano 983+2992, ff. 25r.b16-25v.a1.<sup>20</sup>

*Primus* igitur rex tartarorum fuit Chinchis<sup>1</sup>, *secundus* Cui<sup>2</sup>, *tercius* Bacui<sup>3</sup>, *quartus* Alau<sup>4</sup>, *quintus* Manguth<sup>5</sup>, *sextus* Cublay<sup>6</sup> *qui modo regnat*, cuius *potencia maior est quam fiunt omnium praenoiantorum v praedecessorum eius*. Maius est etiam *solius* ipsius dominum quam sint simul in unum cuncta *regna et dominia* cristianorum regus et omnia saracenorum, sicut in libro hoc *suo loco* patebit manifeste.

[ Itinerarium: 1 chynsis 2 cny 3 bacny 4 esu 5 monghu 6 gublay ]

タルタル人の最初の王はキンキス、二代目クイ、三代目バクイ、四代アラウ、五代マンガト、六代が現在統べているクブライで、その力は上述五人の前任者皆よりも大きい。また彼一人の支配は、キリスト教徒と全てのサラセン人の王の領土と支配を一つに合わせたよりも大きい。そのことは、本書のその箇所ではっきりと明らかになるだろう。

FG は補足を、TA と VA は省略を伴いながらも、語彙と構文において基本的に F に素直に従った訳であったのにたいして、この P は全体として自分の言葉での要約的な書き直しとの感じを与える。この印象は全編を通じて一貫し、分量的にも主要 7 テキストの中で一番少ない。

構成上はやはり VA に最も近いが、そこではまだ残っていた途中の *sapiate per certo che* <しかとご存じありたい> が省かれる一方、*tuti li altri cinque* <他の 5 人全部> は *omnium praenoiantorum .v. praedecessorum eius* <上述その 5 人の前任者たち皆> と重々しく言い換えられている。また最後の、<そのことを本書で明らかにする> との言明は F・FG・VA ではいずれも <私が皆さんに> と一人称で語られていたが、ここでは *patebit manifeste* <明らかになるであろう> と三人称で語られる。こうした変化は全編にわたって認められ、典拠の違いによるのではなく、宗教家向けに翻訳したピピーノの文体によると見られる。*qui modo regnat* <現在統べている>、*solius* <一人>、*regna et dominia* <領土と支配> などは F にはないが VA にあり、P の典拠がそれであることを示している。他版にないのは唯一最後の *suo loco* <その箇所で> のみである。



名前は、Mongu が Manguth と悪化する一方、VA では空白となっていた第 4 代に Alau の名が見える。これは、ピペーノの典拠が今に伝わる VA のそれより良好だったことを示す一つの証拠となる。しかし他の P では様々に異なり、もう一つの最も古い稿本として知られるモデナ・エステンセ図書館写本 Cod.Estense lat.131 では空白、パリ地理学協会ラテン語版 (LT) では Alau、1485 年の最初の刊行本 *Itinerarium* では Esu、グリナエウスの刊行本 (1537 年) では Allau である。この Esu は次の R に登場する。

6) Z (この章を欠く)

7) R : p.135, ll.11-16.<sup>22</sup>

Doppo Cingis Can fu *secondo* signore Cyn Can; il terzo Bathyn Can; il quarto *Esu* Can; il quinto Mongú Can; il sesto Cublai Can, il quale fu piú grande e piú potente di tutti gli altri, *perch'egli ereditò quel che ebbero gli altri, e dopo acquistò quasi il resto del mondo, perché lui visse circa anni sessanta nel suo reggimento. E questo nome Can in lingua nostra vuol dir imperatore.*

チンジス・カンの後チン・カンが 2 代目の君主だった。3 代目バティン・カン、4 代目エスウ・カン、5 代目モング・カン、6 代目がクブライ・カンで、他の皆より偉大で強力だった。というのも彼は他のカンたちが有していたものを継承し、約 60 年間統治の座にあって、その後ほぼ残りの世界を獲得したからである。このカンという名は、我々の言葉で皇帝という意味である。

前半 di tutti gli altri までは、大きく短縮されているが基本的に他の版と変わらない。歴代カアンの名も、第 4 代に Esu というこれまでなかった謎の名前が見られる (この形は、前述 P の *Itinerarium* 版に見えていた) 以外は、ほぼ共通する。ところが、後半 *perch'egli* 以下は他のテキストと全く異なる。もしラムージョ自身による補筆でないなら他の稿本から採られたことになるが、彼が拠ったというギジ家写本 (Z<sup>1</sup>) からかどうかは、その兄弟写本であるゼラダ手稿 (Z) にはこの章が欠けているため、確かめえない。R に用いられたとされる他の 3 テキスト、V・L・VB にもない。

内容から見ても、クビライが <60 年間統治の座にあった> というのは事実 (在位 1260-94) に反するうえ、すぐ後の第 77 章で、「1256 年に統治し始め 1298 年の今まで 42 年にわたっている」(F 他)、とあるのと一致しない。ただし、ラムージョのテキストには 42 年という数字はなく、代わりに「1256 年 27 歳のとき統治し始めた」とあり、それから逆算したのかもしれない。これらからすると、

歴史に関わる補足解説的なものであるだけに、ラムージョ自身による補いの可能性が高くなる。とりわけ最後の、〈このカンという名は・・・〉は間違いなくそれであろう。Rには全編にわたってこうした補筆がかなり頻繁に散見される。

## 2.2 「磁器」(第158章) 4\*

次に、前稿「ザイトン 泉州」<sup>23</sup>で取り上げた第158章「ザイトン」の磁器の箇所を対校する。ここでは内容の異同を主に見る。

### 1) F : Ms.fr.1116 (74r. a20-29)<sup>24</sup>

Et encore voç di que en ceste provence en une cite que est apelle tinugiu<sup>1</sup> se font escuelles de porcellaine grant e pitet les plus belles *que l'en peust deviser*, et en une autre part nen s'en font se ne en cest cite, et d'iluec se portent por mi le monde. Et hi n'i a aseç et grant merchies si grant que bien en aurest por un venesian gros III escueles si belles *que miaus ne le seusent nul deviser*.

[ Benedetto: 1 Tiungiu ]<sup>25</sup>

「さらにいいですか、この地方のティヌジュという市では大小のポルスレーヌの碗が造られ、それは人が述べる最も美しいもので、その市以外の他のいかなる所でも造られず、そこから世界中に運ばれる。またいっぱいあってとても安く、一ヴェネツィアグロスで誰もよりうまく述べることもできないほど綺麗な碗が三つも得られるほどだ」

冒頭の *Et encore voç di que* を始めとして、歴代カアンの箇所とまさしく同じルスティケッロの言葉と文体であることが確認できよう。磁器の美しさを強調する *que l'en peust deviser*〈述べ得る〉と *que miaus ne le seusent nul deviser*〈誰もよりうまく述べ得ぬほど〉の二つの修辞は、他の版では *moult*〈とても〉とか *le piu*〈最も〉といった語で済まされるか省かれる。

その磁器の町をベネデットは *tiungiu*、ペリオは *tinugiu* に読む<sup>26</sup>。手稿本では *n* と *u* は判別し難く、どちらとも読めるが、F写本に見る限り *-un-*よりは *-nu-*に近い。第2音 *-giu* は州の対音であり、漢字が単音節である原則からすれば、第1音は *tinu-*よりも *tiun-*の方が相応しいが (*tinn-*も考えられるが、F写本では *-nn-*の形は見られない)、この町がどこか同定されず、対応する漢字が定まらない。他の写本でも様々に異なる<sup>27</sup>。

### 2) FG : Ms.fr.5631 (63v. a29-35)<sup>28</sup>

Et sachies que *pres de ceste cite de Cairon*<sup>1</sup> a une *autre cite* qui a nom tiunguy<sup>2</sup>, la ou l'en fait *moult* d'escuelles *et* de pourcelainnes qui sont *moult* belles. Et en nul autre *port* on n'en fait forz<sup>3</sup> que en cestuy, et en y a l'en moult bon marchie.

[Pauthier: 1 Çaiton 2 Tiungui 3 fors]<sup>29</sup>

「このカイロン市の近くにティウングイという別の市があり、そこではとても綺麗な碗とポルスレーヌがたくさん造られることをご存じ下さい。そこ以外のどこの港でも造られず、そこではとても安い」

全体的に要約され短縮していることの他に、内容に係わる誤読が目立つ。まず磁器の町について、F では単に *en ceste provence* <この地方>であったのに対して、「*pres de ceste cite de Cairon* <このカイロン市の近く>に置く。*Cairon* は Çaiton <ザイトン>の誤記である。前述のごとくティンジュはどこか定まらないが、この文によるとザイトンの近くの *autre* <別の>町となり、その同定に係わる。次に、F: *escuelles de porcellaine* <ポルスレーヌの碗>に対して、*d'escuelles et de pourcelainnes* <碗とポルスレーヌ>と並べる。これでは、*pourcelainnes* とは何か理解しなかったことになる。さらに、*port* <港>は F: *part* <ところ>の単なる誤読であろう。

### 3) TA : Ms.II.IV.88 (61r.17-22)<sup>30</sup>

E in questa provincia ae<sup>1</sup> una citta ch'a<sup>2</sup> nome tenuguise<sup>3</sup>, che vi si fanno le piu belle iscodelle<sup>4</sup> di porciellane<sup>5</sup> del mondo. Et non ne se ne fae inn altro luogho del mondo et quindi si porta in d'ongni<sup>6</sup> parte, et per uno viniziano se n'avrebbe tre le piu belle del mondo et *le piu divisate*.

[Ruggieri: 1 hae 2 c'ha 3 Tenugnise 4 scodelle 5 porcellane 6 d'ogni]<sup>31</sup>

「またこの地方にテヌグイセという市があり、そこではこの世で最も美しいポルチェッラーナの碗が造られる。世界の他の地では造られず、だからそこからあらゆるところに持ち運ばれる。また、一ヴェネツィア [銀貨] でこの世で最も綺麗で多様なのが三つも得られるだろう」

全体的縮約は FG と同じであるが、上のような誤解はない。*tenuguise* は、F の文 *tinugiu se font escuelles* <ティヌジュで碗が造られる>の *tinugiu* と *se* がくっ付いたものである。TA の典拠 (F<sup>2</sup>) でそうになっていたのかそれとも写字生が誤読したのかは分からない。第2音 *-gui* は、手稿本では *-iu* と *-ui* は判別し難い

ことによるもので、州-chou/-zhou の対音であるから F の-giu がより近い。第 1 音 tenu-は、FG の tiun-よりも F の tinu-に近い。最後の *divisate*<多様な>は、F の *deviser*<述べる>がイタリア語 *divisare*<区別する>と混同され、その過去分詞形容詞と解されたものである<sup>32</sup>。

4) VA : Ms.CM 211 (56v.14-16)<sup>33</sup>

Anchora in questa contra è una zita a nome linigui, in la qual se fa schudelle de porzellane *de mar* molto belle.

「さらに、この地域にはリニグイという市があり、そこではとても綺麗な海のポルチェッラーナの碗が造られる」

縮約の度はさらに増し、磁器生産の事実を述べるに止まる。linigui は語頭 t の l への誤読であろう。碗は *de porzellane de mar*<海のタカラ貝の>とあり、ポルチェッラーナがまだ磁器ではなくタカラ貝を意味していたことをよく示す。VA のみにあり、どこかの段階での写字生の補筆とみられる。

5) P : Ms.Riccardiano 983+2992 (69r. b21-25)<sup>34</sup>

In hac regione est ciuitas Tingui, ubi scutelle pulcherrime fiunt de terra que dicitur porcellana.

「この地域にはティングイ市があり、そこではポルチェッラーナと呼ばれる土からとても綺麗な碗を造る」

縮約については VA と同じで、P の主底本がそれであることをよく示す。町の名 Tingui が VA より良好なのは、上のパドヴァ写本 (VA<sup>3</sup>) が 1445 年のものであるのに対して、この P が 14 世紀前半とよりオリジナルに近いからである。VA の最も古いカサナテンセ写本 (VA<sup>1</sup>) はこの章を含む後半を欠き、祖本ではどのようなであったか確かめ得ない。一方、*de terra que dicitur porcellana*<ポルチェッラーナと呼ばれる土から>と、VA にはない誤解がある。これらからして、もとはタカラ貝を意味した *porcellaine / porcellana* を、すでにこの時代に<磁器>と訳していいかためられる。

6) Z : Archivio Capitulares de Toledo, Ms.49.20.Zalada (52r.18~52v.9)<sup>35</sup>

Et etiam in hac *patria*<sup>1</sup> prouincia<sup>2</sup> quedam ciuitatis<sup>3</sup> nomine Tinçu. ubi fiunt parasides de porcelanis *in magna quantitate* pulciores que que possint *inueniri*. & in illa<sup>4</sup> ciuitate fiunt preterquam in ista & ab ista ciuitate feruntur per mundum *in multas partes*. & sunt ibi multe & pro bono foro, ita quod pro uo<sup>5</sup> grosso veneto haberentur tres parasides ualde pulcre. & *parascides iste de huiusmodi terra fiunt: videlicet quod illi de ciuitate coligunt limum & terram putridam, & faciunt magnos montes & sic eos dimitunt per xxx & xl annos quod ipsos montes non mouent. & tunc terra in illis montibus tam longo tempore ita conficitur. quod parascides facte ex ipsa colorem habent accuri. & sunt ualde relucetes & pulcerime ultra modum. Et debetis scire quod cum homo terram illam congregat pro filijs eius congregat; videlicet quod propter longum tempus quo debet quiescere ad confectionem ipsius, non sperat consequi inde lucrum nec ponere ipsam in opus set filius qui post ipsum est uicturus fructum consequitur ex ipsa &ct.*

[ Barbieri: 1 <et> 2 <est> 3 civitas 4 nulla 5 uno ]<sup>36</sup>

「またこの地方のこの地域には<sup>37</sup>ティンズという町があり、そこでポルスレーヌの碗が大量に造られ、それは見出し得る最も美しいものである。ここ以外のどの町でも造られない。そしてこの町から世界中の多くの地に運ばれる。ここではたくさんまた安く売っているから、1 ヴェネツィアグロッソで素晴らしい碗が三つ得られるだろう。その碗は次のような土から造る。すなわち、この町の者たちは泥や腐食した土を集めて山と積み上げ、それを 30 年 40 年と動かさないでそのままにして置く。やがて山の土はその長い間に精錬され、それから造られた碗は青色を帯び、とても輝いて殊のほか美しい。また、ご存じありがたいが、その土を集めるとき、自分の息子たちのために集めているのである。つまり、精錬のために寝かせておくべき長い期間ゆえ、それで金を儲けることも使うことも期待できず、それから利益を手にするのはその後生きる息子の方なのである、云々」

前半は、冒頭の *et encore voç di que* が省かれている以外、表現上の小さな異なりは別として、内容的に F と全く同じとあってよい。文体的にも前の歴代カーンの個所に見た、自分の言葉での書き換えともいえたピピーノのラテン語よりずっと F に忠実である。ところがその造り方について語る後半 *& parascides iste de huiusmodi terra fiunt* 以下は、F 系 A グループのテキストにはない全く新しいしかも詳細なものである。前稿「ザイトン泉州」で述べたごとく、オリジナルからあったのが F で省略されたのかそれとも Z で加筆されたのか、今のところ決める手立ては見つからない。

最後は&ct<云々>と終わる。これが、まだ続きがあるが省略するという意味か、それとも適当に省略してきたという意味かは分からないが、少なくともその一部は R にうかがうことができる。

7) R (p.248 l.33~p.249 l.9)<sup>38</sup>

*Il fiume che entra nel porto di Zaitum è molto grande e largo, e corre con grandissima velocità, ed è un ramo che fa il fiume che viene dalla città di Quinsai; e dove si parte dall'alveo maestro vi è la città di Tingui, della qual no si ha da dir altro se non che in qualla si fanno le scodelle e piadene di porcellane, in questo modo, secondo che li fu detto. Raccolgono una certa terra come di una minera e ne fanno monti grandi, e lascianli al vento, alla pioggia e al sole per trenta e quaranta anni, che non li muovono: e in questo spazio di tempo la detta terra si affina, che poi si può fare dette scodelle, alle qual danno di sopra li colori che voglion, e poi le cuocono in la fornace. E sempre quelli che raccolgono detta terra la raccolgono per suoi figliuolo o nepoti. Vi è in detta città gran mercato, di sorte che per un grosso veneziano si averà otto scodelle.*

「ザイトンの港に注ぐ川はとて大きく広く、非常な速さで流れ、キンサイ市から来る川の支流をなす。その本流から分かれる所にティングイの町があるが、そこはポルチェッラーナの碗や皿が造られること以外語るべきことはない。彼に語られたところによると、次のように造る。すなわち、ある種の土を鉱脈のようなところから集め、それを山と積み上げ、30年40年と動かさないで、風・雨・日にさらしたままにして置く。この間に土は精錬され、その後上述の碗を造り、その上に好みの色を付け、しかる後竈で焼く。また、その土を集める者はいつでも、自分の息子か孫のために集めるのである。この町ではとても安く、そのため1ヴェネツィアグロッソで碗が八つ得られるだろう」

このように R は、F・P・Zとも異なりを見せる。前半、最初の川については前の杭州や福州の章の記事を加えた要約である。Tingiu は Z と一致する。碗に加わった piadene<皿>は VB からである。他は、磁器の製造以外 *no si ha da dir altro*<他に語るべきことはない>と端折る。全体として訳ではなく書き換えと言ってよい。一方、後半の造り方は基本的に Z と一致するが、*alle qual danno di sopra li colori che voglion, e poi le cuocono in la fornace*<その上に好みの色を付けしかる後竈で焼く>と、新たな情報を伝える。以下、この磁器の記事、とりわけ Z

と R が引き起こすマルコ・ポーロの書のオリジナリティーに係わる問題については、前稿に譲る。

## 2.3 プリサンギン 盧溝橋 (第 105 章) [略] <sup>5\*</sup>

### 3. おわりに

ユールの言う「謎」のうち旅については、一つにはそれが本当に行なわれたかどうかを疑わせしめるような誤りや偽りや欠落があることに、もう一つはそれを決定的な形で証明する記録が存在しないことに基づいていた。

ここはそれらについて詳述する機会ではないが、同書には誤解・誤記・不正確・あいまいな伝聞や根拠のない推測などは確かに数多いし、多くはないが明らかな捏造・創作もあり、またよく指摘されるごとく、長城・漢字・茶・印刷術・箸等、必須とも言うべき中国事項のいくつかが欠けていることも事実である。これらに対してはしかし、作者は東方の百科事典を意図したわけではないとの一般的な弁護のほかに、それらとてポーロの旅を否定するもの、すなわちマルコが中国に滞在しなかったことの積極的な証明とはならないと反論することもできる。否むしろ、それらを補って余りある膨大な正確で詳細な記事の中にあつて、それら不正確で誤った記事はむしろ、同書の内容が他の書物から写された間接的なものではなく、確かに現地に在った者によって直接自らの目と耳で得られたものであることを逆に証していると言ってよいほどである。

次に、決定的な記録の欠如については、ユールから 1 世紀以上が経った今も状況は変わらない。クビライの宮廷に仕えた役人であったとの自称にもかかわらず中国のどの史書にもそれらしき名前の記載のないこと、コカチン姫を送ってのペルシア使節一行の中に彼ら 3 人の名前の見られないことは夙に知られるし、その後ヴェネツィアの古文書庫に数多く発掘されたポーロに関わる文書にも、その旅を公式に記載したものは今なお発見されていない。また、その旅のためにいろいろと接触をもったという教会側の文書にも、東方交易に深く関わっていた市当局の記録にもポーロに言及したものはないし、彼らの活動や帰還を記した年代記もない。さらには、そこでかの書を編んだというジェノヴァのヴェネツィア人捕虜のリストの中にもマルコの名前はないし、その後かの旅行記が書かれたことを伝える同時代の記録もない。

不思議なことではあるが、これらもまたしかしその旅が行われたことを決定的に否定するものとなるわけではなく、旅行記の中で自称されている役割や活躍がおそらく誇張されたものであったことと、ポーロたちの活動が当時の関係者たち



によって記録に留められるべきほど重要な意義を認められなかったことを意味するのであろう。

決定的な公式の文書はないが、一方その旅を傍証する記録や情況証拠は数多い。詳細は別のところで述べたが<sup>39</sup>、とりわけヴェネツィア・サン・クリソストモ区のポーロの館の購入記録、叔父老マルコの遺言書、叔父マフェオの遺言書、麝香をめぐる裁判記録、自身の遺品目録、ラテン語訳者ピピーノの序文、パドヴァの自然学者ダーバノの証言等である。が、それらよりも何よりも、かの旅行記そのものがその最大にして最良の証明であろう。現地に旅せずしてかの詳細にして正確な情報をもたらすことの困難なことはすべからず認められるし、細部や一部はともかく、かの旅の経緯とその書の内容を全て創作あるいは捏造することはまずもって無理というものであろう。

とすれば、そのことは直ちに次の「謎」、ではその書はどのようにして成ったのかとの疑問へとつながってゆく。ヴェネツィアのポーロ家の3人が26年の長きにわたって東方に旅し、目撃と伝聞、自分と他人、体験と書物、事実と想像など、様々な形で膨大な情報を手に入れ、それをマルコがジェノヴァの獄でピーサの物語作家ルスティケッロに伝えて1298年に成立した、というのが同書の序文に書かれている経緯である。それ以上のことについては確かなことは何も書かれていない。マルコから提供された情報はどのような形だったか、二人の共同作業はどのように行なわれたか、ルスティケッロの役割はどの程度だったか、そうして編まれた最初のもの、オリジナルはどのようなものであったか、これらについては何も明らかでない。さらにその謎を増幅するのが、これほど様々な版が存在し、それらの間に大きな異なりがあるのはなぜか、はたしてどこまでがポーロの手になるものかという疑問である。

Fと通称されるパリ国立図書館 Ms.fr.1116 が、ルスティケッロが筆録したというオリジナルに言語的には最も近いであろうと一致して認められることはすでに見た。他の代表的テキスト FG・TA・VA・P もそれに近い稿本からのそれぞれの言語や方言への翻訳であることも明らかになった。事実、内容的にも基本的によく一致している。一方、ZとR（とV・L）にはそれらF系のテキストにはない多くの新たな記事が見出されることも知られるところとなった。それがどれほど大きく異なるかは、上に見た磁器の記事に明らかであろう。

これら独自記事を、ユール他は、解放後マルコがヴェネツィアに残っていたメモをもとに書き加え、それらが次々と新たな写本に取り込まれていったと考えた。これを根拠がないと批判してベネデットは、ジェノヴァで作成されたオリジナルには全ての記事が含まれていたのだが、次々と転記される過程で抜け落ち、縮小

され改変されて、今に見られるような内容しかとどめなくなった、という正反対の結論に達した。ベネデットのこの結論は、三段階の緻密な検証から導かれる。

まず彼は、筆録者ルスティケッロの作品とみなされる騎士物語と旅行記のそれぞれ最も古い写本、パリ国立図書館 Ms.fr.1463 と Ms.fr.1116 を照合して、両者の文体や表現・語句がかの序文冒頭の文章のみならず全般にわたってよく一致することから、旅行記 Ms.fr.1116 が部分的にではなく全面的にルスティケッロの手になるものであることを導き出す。次に、従来 of 諸家において F がジェノヴァで作成されたオリジナルそのものか極めてそれに近い忠実なコピーと見なされたのに対して、F と FG・TA・VA らのテキストを対校してみると、内容的に基本的に一致する一方、多くの部分において F の方が豊かで古い形を示し、他の写本では誤っていたり、省略されたり要約されたりして簡略化された形をとどめていることから、それら写本が F に近い稿本から派生したことは明らかであるが、しかしいくつかの点では F にはない記事を残していたり、より古い優れた形をとどめていたり、F が誤っていて他が正しい箇所のあることからして、F はオリジナルではなく、それらに共通する祖本のあったことを想定しなければならない、と結ぶ。そして最後に F と Z (ただしアンブロジーナ模写) を対校すると、Z が、F と兄弟関係にあるがそれよりもはっきりと優れたフランク-イタリア語写本からほぼ忠実にラテン語訳されたものであることが証明される一方、内容的には、Z の兄弟本であるギジ写本からのイタリア語訳を含む R をも合わせて、約二百の箇所において F にない記事を有していることが明らかになった。そしてその多くは、R の独自記事と一致する。以上から、Z と Z<sup>1</sup> (R の底本ギジ写本) の祖本もフランク-イタリア語版であり、したがってそれは F 系稿本をも含めた全てに共通する祖本と考えられなければならない、と結論付けた。

ベネデットのこの説は、説得力を持つ精緻なものであったが、もっぱら言葉の側からの文献学的証明であり、内容の側からの歴史的証明を欠いていた。とりわけ最後のアジア史の部分では、Z には 1295 年の帰国後どころか 1298 年の執筆以後の事件も記されている。また当時の歴史にもとる記述のあることは、一例として上の磁器の製造法のところに見た。記事によっては F と Z で異なる情報源が挙げられ、それが互いに矛盾している場合がある。また何よりも、200 箇所にも上る大量のしかも史実に合った Z の記事が F 他のテキストで削除されたり欠落するに至った経緯が十分に説明されなかった。その原因・理由としてベネデットは、あまりにも子供っぽかったり、下品な話題であったり、宗教や道徳に触れる問題であったり、具体的な有益性がなかったり、あるいは訳者や写字生が信用しなかったり興味を持たなかったりしたことを挙げるのであるが、F にはこれらの理由のそれぞれに該当する性格の記事が他にも多く残っている。それどころか不思議

なことに、Z・R にあって F にない記事には、アフマド事件やクビライの側室選び、カタイの娘たちの暮らしぶりや福州の隠れキリシタン（マニ教徒）等、かえてより興味深いものが多い。しかも、前稿の磁器や箆に見られるごとく、そのほぼ全てでより詳細にして正確であった。

さらには、写本 F の正確な制作年代は不明であるが、それに近い一本（F<sup>1</sup>）が、マルコから直接かどうかはともかく、1307 年頃ヴェネツィアでティボー・ド・セボワの手に渡り、それに基づいて FG が作られたことはほぼ確かのようである。しかしながら、マルコが進呈したその稿本に Z の独自記事を含む全ての記事があり、それが訳者グレゴワールによって省略されて今のような姿になったとは、FG が F（および TA・VA・P 等）と構成も内容もよく一致することからして考え難い。とすると、ベネデットの説を当てはめると、その稿本（F<sup>1</sup>）の段階ですでに Z の独自記事は脱落していたことになり、1298 年から遅くとも 1307 年のわずか 10 年間に 200 もの大量の記事が削除されたことになる。しかもその理由は不明である。しかもまた、FG の声明文にあるごとくティボーがマルコから直接進呈されたのなら、著者マルコは Z の独自記事をも含んでいたオリジナル版ではなく、F のような縮小版を与えたことになる。もしそうなら、マルコの手元には同書のオリジナルもしくはその忠実な写本はなく、ヴェネツィアに出回っていた縮小版を取り寄せてティボーに進呈したか、それともマルコから直接もらったというのは、自らの稿本に権威を付与するためのティボーの捏造か、どちらかである。ベネデットも、直接マルコからもらったとのティボーの言を疑う。これらに対する納得のいく説明はまだ見出されていない。

ではもしそれら独自記事が、ベネデットの言うごとくジェノヴァのオリジナルの段階から含まれていたのではなかったとすれば、つまり F での削除によるものではなく Z での追加によるものであったとすれば、誰の手になるものか。ユールの言うごとく、解放後のヴェネツィアでマルコによって書き加えられたのか。一例に見たごとく、内容からすればポーロのように東方に精通した者にしか書けぬ性質のものであり、その可能性はある。が、それにしては考え難いような誤りが残っているのも否定しがたい。それとも、後世の全く別の人物の手になるものか。Z は、ベネデットによれば F よりも古い一フランク-イタリア語稿本からのラテン語訳であるが、それがいつ誰によって訳されたかは分からない。今に伝わるセラダ写本そのものは 15 世紀後半 1470 年頃作成になるものとされるが<sup>41</sup>、その間の事情は全く知られない。オリジナルからすぐラテン語訳され、その一つから 15 世紀後半に Z が転記されたのか、それともどこかに伝わっていたオリジナルに近い写本からその頃にラテン語訳されたのか、不明である。いずれにしてもオリジナルは残っていない。ラムージョのギジ写本も「150 年前」つまり 1400 年頃の

ものだという。1 世紀半以上のこの隔たりからからして、後世の追加の可能性も排除できない。そのラテン語も、上に引いたわずかな文にも分かるごとく、P のそれとは全く異なる新しいものであった。もし Z が F や FG よりもオリジナルに近い一写本からのラテン語訳であったとすれば、15 世紀後半までなぜ知られなかったのか。少なくともピピーノは自分のが最初のラテン語訳（1315 年頃）だという。もし 15 世紀後半にラテン語訳されたのなら、その祖本はどのように保存され、またその後どうなったか。これらも謎のままである。それでもベネデットによれば、Z は F にない記事も F と一致する部分と同じ文体、つまりルスティケッロの文からであるという。

このように、その旅にせよ書にせよ、あらゆるところで何らかの障壁や矛盾に出会う数々の問題、まさしくユールの言う「謎」を解く手立ては、もはや今に伝わるこれら様々な稿本の中にしか残されていない。ここで行なった作業はそのための最初の一步であるが、日暮れて道は遠い。

1\*. 初出：『大阪国際大学紀要 国際研究論叢』vol.23-2, 2010.

2\*. 主に、ベネデット「写本の伝統」（「百万遍」第 1・2・3 号に全訳）に基づく。各写本の図版はそこに掲げてある。

3\*. 各写本の当該ページは巻末にまとめて掲げる。

4\*. 本稿「9 ザイトン泉州」に遡る。

5\*. 謎シリーズ「IV 盧溝橋」参照。

1. Henry Yule & Henri Cordier: *The Book of Ser Marco Polo*, Amsterdam Philo Press 1975 (London 1871, 1903-20), vol.1 p.1 [以下 Yule].

2. *Marco Polo Il Milione*, prima edizione integrale a cura di Luigi Foscolo Benedetto, Firenze Leo S. Olschki 1928 [Benedetto].

3. A.C.Moule & Paul Pelliot, *The Description of the World*, vol.I, New York AMS Press 1976 (London 1938) [Moule].

4. 以下、テキストの歴史と系譜については、Cfr. 拙稿<sup>1</sup>「ルスティケッロ・ダ・ピーサーマルコ・ポーロ旅行記の筆録者」『大阪国際女子大学紀要』vol.24 - 2, 1998, pp.1-48.

5. 以下、各写本と刊本については、Cfr. 上記ベネデット「序文：写本の伝統」*Introduzione: La tradizione manoscritta*, in Benedetto およびその拙訳「ベネデット『マルコ・ポーロ写本』」（1~5）, 『大阪国際女子大学紀要』voll.24-2 ~ 27-1, 1998-2001, 同(6) 『大阪国際大学紀要国際研究論叢』Voll.16-2 ~ 17-1, 2003.

6. *Il Libro di Messer Marco Polo Cittadino di Venezia detto Milione dove si raccontano le Meraviglie del Mondo*, tr. da Luigi Foscolo Benedetto, Milano-Roma, Treves-Treccani-Tumminelli 1932 [Benedetto<sup>1</sup>]; その英訳 *The Travels of Marco Polo*, tr. by Aldo Ricci, London Routledge 1931 [Ricci]; その和訳『東方見聞録』愛宕松男訳註、平凡社東洋文庫 1978 [愛宕].

7. Moule pp.57-489.

8. Benedetto, pp.LVI-LX.

9. 拙稿<sup>2</sup>「ラムージョ “マルコ・ポーロの書序文”(1)—マルコ・ポーロ伝記研究」《愛媛大学教養部紀要》 vol.24, 1991, pp.53-106.

10. L.F.Benedetto, *Ancora qualche rilievo circa la scoperta dello Z toledano*, 《Atti dell'Accademia delle Scienze di Torino》 94 (1960) pp.519-78.

11. 原写本には句読点はないが、必要に応じて付す。アクセント記号は付けない。人名・地名の語頭文字の大小は原本のままに写す。明らかな誤綴りもそのままに転記した。

12. Bibliothèque Nationale de France, Paris, Ms.fr.1116 [F]。 (29r.B31~29v.A13) は、第 29 葉表 B 欄 (第 2 欄) 31 行から同裏 A 欄 (第 1 欄) 13 行までを示す。

13. Benedetto p.53. 単なる綴りの校訂等は省く (以下同)。他に、*Voyage de Marc Pol, Recueil de Voyages et de Mémoires*, par la Société de Géographie, Tome I, Paris 1824 [Société]; *Le Divisament dou Monde*, a cura di Gabriella Ronchi, Milano Mondadori 1982 [Ronchi-F] .

14. Bibliothèque Nationale de France, Paris, Ms.fr.5631 [A<sup>1</sup>].他に、同 Ms.fr.2810 (A<sup>2</sup>); British Museum, London, Ms. Regio 19D1 [B<sup>1</sup>]; Bodleian Library, Oxford, Ms.Bodleian 264 [B<sup>2</sup>].

15. *Le Livre de Marco Polo, citoyen de Venise*, par M.G.Pauthier, Paris Didot, 1865, pp.184-86 [Pauthier].

16. Biblioteca Nazionale Centrale di Firenze, Ms.II.IV.88 [TA<sup>1</sup>].他に、同 Ms.II.IV.136 [TA<sup>2</sup>].

17. *Il Milione*, a cura di Ruggero M.Ruggieri, Firenze Olschki 1986, p.155 [Ruggieri].他に、*Milione*, con Indice Ragionato di Giorgio R. Cardona, a cura di Valeria Bertoluzzi Pizzorusso, Adelphi Milano 1975 [Pizzorusso]; *Milione*, a cura di Gabriella Ronchi, Milano Mondadori 1982 [Ronchi-TA] .

18. Biblioteca Civica di Padova, Ms.CM 211 [VA<sup>3</sup>].他に、Biblioteca Casanatense di Roma, Ms.3999 [VA<sup>1</sup>].

19. *Il Milione Veneto*, a cura di Alvaro Barbieri e Alvise Andreose, Marsilio Venezia 1999, pp.156-57 [Barbieri<sup>1</sup>].他に、*Marco Polo, Ms.CM211 della Biblioteca a Civica di Padova*, a cura di Hideki Takata, Osaka International Univ. 2000

[Takata]; M. Pelaez, *Un nuovo testo Veneto del Milione di Marco Polo*, «Studi Romanzi» IV 1906 pp.5-65 [Pelaez].

20. Biblioteca Riccardiana di Firenze, Ms.Riccardiano 983+2992 [P<sup>9</sup>] (P の番号は Moule による:pp.512-14)。他に、Biblioteca Estense di Modena, Cod.estense lat. 131 [P<sup>24</sup>].

21. *Manuscripts and Printed Editions of Marco Polo's Travels*, by Shinobu Iwamura, The National Diet Library Tokyo 1949, p.41 [Itinerarium]。他に、Marci Pauli Veneti, 'De Regionibus Orientalibus', *Novus Orbis Regionum ac Insularum Veteribus Incognitarum*, pp.330-417, Basilea 1537 [Grinaeus] ; Andreas Mullerus: *Marchi Pauli Veneti, Historici fidelissimi juxta ac praestantissimi, de Regionibus Orientalibus*, Georgii Schulzii 1671 [Müller] ; Marco Polo il Milione , con le postille di Cristoforo Colombo, tr. da Luigi Giovannini, Roma Edizioni Paoline 1985 [Giovannini].

22. Giovanni Battista Ramusio, I viaggi di messer Marco Polo, gentiluomo veneziano, *Navigazioni e Viaggi*, a cura di Marica Milanese, Torino Einaudi 1980, vol.3 pp.75-120 [R].

23. 拙稿<sup>3</sup>「ザイトン泉州ーマルコ・ポーロの東方(1)」『大阪国際大学紀要国際研究論叢』vol.23-2, 2010, pp.133-152.

24. F : Ms.fr.1116 (74r.a20-29).

25. Benedetto p.160.

26. Paul Pelliot, *Notes on Marco Polo*, Paris Imprimerie Nationale Librairie Adrien-Maisonneuve, 1959, 'Tingiu', pp.853-56.

27. Cfr. 拙稿<sup>3</sup> pp.137-44.

28. FG<sup>1</sup> : Ms.fr.5631 (63v.a29-35).

29. Pauthier pp.532-33.

30. TA<sup>1</sup> : Ms.II.IV.88 (61r.17-22).

31. Ruggieri p.243.

32. Ruggieri は、この *divisate* を *dipinte/disegnate* <絵の描かれた> と注釈しているが、前稿で述べたごとく、13 世紀末当時はまだ彩色絵付け磁器は造られていない。

33. VA<sup>3</sup> : Ms.CM 211 (56v.14-16).

34. P<sup>9</sup> : Ms.Riccardiano 983+2992 (69r. b21-25).

35. Z : Archivio y Biblioteca Capitulares de Toledo, Ms.49.20.Zelada (52r.18~52 v.9).

36. *Marco Polo Milione*, a cura di Alvaro Barbieri, Parma Ugo Guanda 1998, pp.246-48 [Barbieri]; A.C.Moule & Paul Pelliot: *The Description of the World*, vol.II, New York AMS Press 1976 (London 1938), p.l v-lvi [Moule-Z] .

37. Z の原文 *in hac patria provincia* を、Barbieri は *in hac patria <et> provinci a* <この国と地方に>と校訂し、Moule は *in hac predicta provincia* <前述のこの地方に>のことであろうと注記する(Moule-Z p.lv)。前者では意味が明確でないこと、*patria* は Z ではこうした文脈で使われていないことからして、後者の可能性が高い。

38. ここでは欧文イタリック体と和文斜字体は Z との異なりを示す。

39. 拙稿<sup>4</sup>「マルコ・ポーロ年次考(2) — 中世ヴェネツィア年代記」『大阪国際女子大学紀要』vol.25-2, 1999, pp.45-73.

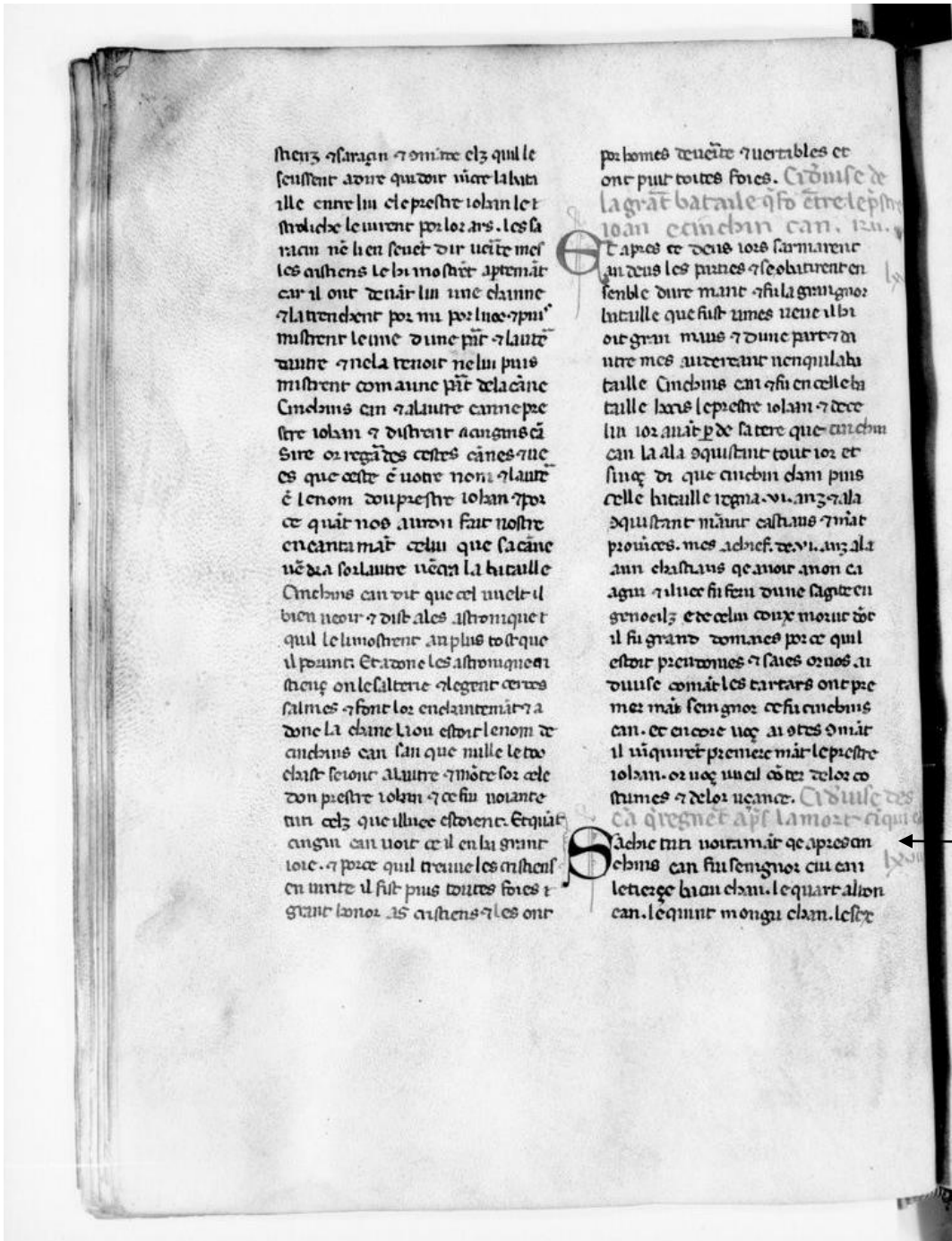
40. Benedetto, 'Introduzione' pp.LVI-LX.

41. ムールによれば、1470年頃は Sir Sydney Cockerell と E.H.Minns による判定、前述トアルドは 1400年頃、トレドの研究者は 15世紀前半に置く : Moule, 'The Introduction' p.50。バルビエーリは 15世紀後半イタリア北部作とする : Barbieri p.178。



1 F : BNF fr 1116, ff. 27v.b31-28r.a13.

(f. 27v)

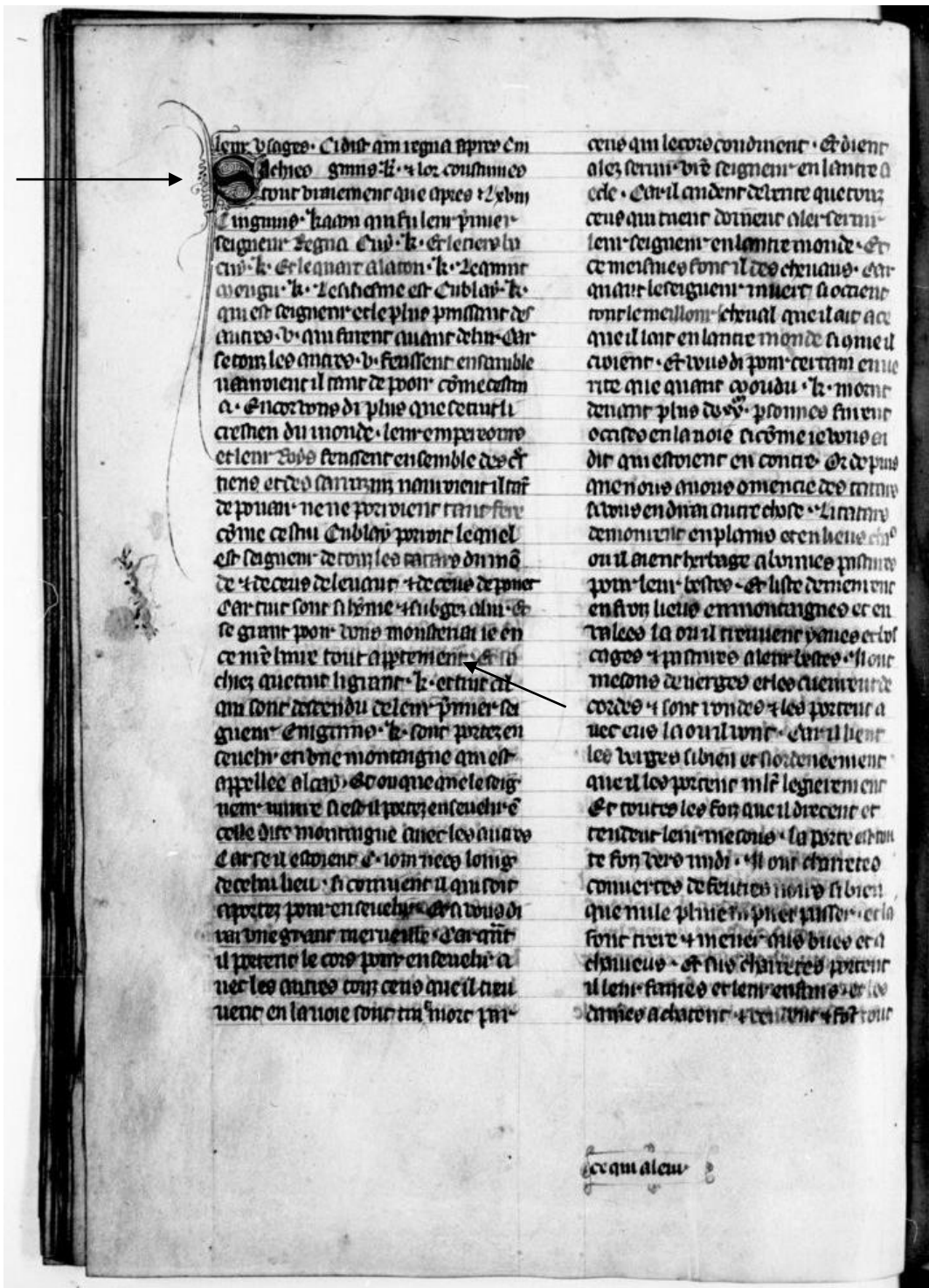


Source galli

me cublai can qui è le greingnoz  
 ete plus posant que ne fust nul  
 des autres car tant les autres aq  
 fussent en semble ne auront tāt  
 de por cum cestui cublai et eno  
 re naq di greingnoz coule quele  
 te naq di que tant les enpor don  
 montee et tous les rois recistēt  
 et desara en ne a ont tant por  
 ne por oier il fait tant come ce  
 stu cublai grant clam. poroit il  
 fait et ce nos moistrer en no  
 stre liure tout apertamāt. Et la  
 gies deuoir que tant les grant  
 seingnoz que sunt estes descendre  
 tou la lignee de anelms can. r  
 sont por des asouellir a une grant  
 montaigne qui è apelles alai  
 et auques les grant seingnoz  
 des tartars muere seil munset  
 C. i. once longe de celle motag  
 il ouent que sapiret il uce as  
 uellir et si naq di un autre men  
 uoir que quāt les cors de cesti  
 grant clam sūt apertes a celle  
 motagnes et il soient longne  
 xl. iouces ou plus ou mistoues  
 les gens qui en cōnerēt por les  
 uoirs touz les cors sūt port  
 tes sūt nus ale spee por celz  
 que le cors conduēt et dient  
 ales seuir uostre seingnoz en  
 l'autre mūde car il auent uo  
 iramāt que tant celz qui ont

28  
 toient a les sūr los seingnoz en l'autre  
 mūde et ce meisme font illes des cha  
 nauebz. car quāt le seingnoz muere  
 il occient tant les moilles et beiaus que  
 le seingnoz auoit font ocire por ce le se  
 ingnoz lat en l'autre mūde. Et la dief  
 que quāt māgn clam mouir plus de  
 x. i. homes furent occis que en content  
 le cors qui il se portoit asender et de  
 plus que naq nos mis omencas de  
 tartars si naq en dōra maintes choses  
 les tartars demōrēt lonnes es plan  
 et en leus elair ou il ait elaires et  
 ben pastour por loz bestes et la dief de  
 mouir en sūr leus en mōtagnes et  
 en uales la ou il trouuēt euies et loz  
 elaires et pastour loz bestes il ont ma  
 son de sūt et le cōrent de femmes et sūr  
 ront et se portent a les et la uques il  
 uont. car il ont lies le ne gres de sūt  
 sūt sibien et de cōmāt qu'il se puet  
 porter liare mēt. Et toutes les foies  
 que il occient et de cōnt loz maison  
 la porte è toutes foies de uer ni di  
 il ont elairete cōite de fente noir  
 sibien que se il puet de uoir tūc ne  
 ten gner touz mille elaires que fust  
 en la elairete il la font mener et ma  
 ire as bues et a camaus et de sūt  
 cestes elairete portent il loz femē et loz  
 en sanz et naq di que les dames a  
 elairete qu'entēt et ouerēt touz ce  
 que ason bōn et asomesme becon  
 que car les homes ne se buent de

(f. 23v)

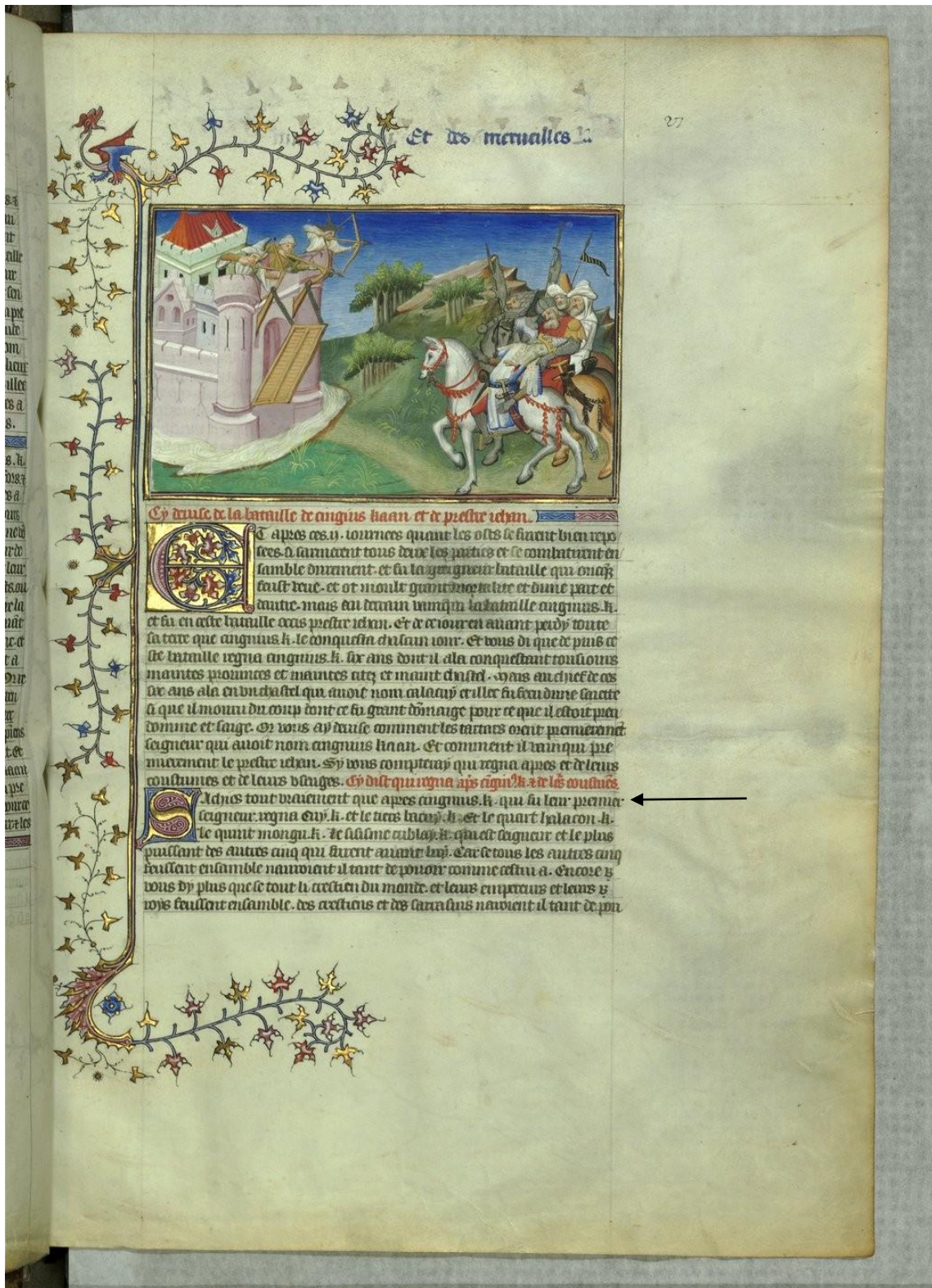


leur usages. Cidist am regna aprie em  
 Alheo gms li. 4 lor conthmeo  
 tout dument que apres 12 xbm  
 Cingmo. haom qui fu leu pmer  
 seigneur regna Cw. k. Et leu lu  
 au. k. Et leu air alaton. k. Leu air  
 avongu. k. Leu air est Cublai. k.  
 qui est seigneur et le plus pmer des  
 auars. v. qui furent auant d'hu. Car  
 secom les auars. v. fessent ensemble  
 uennoient il nre de pou. com castm  
 a. En ce temps di plus que seaur li  
 cremen du monde. leu empereur  
 et leu. v. fessent ensemble des et  
 tiens et des. Cidist am nom vint il nre  
 de pouar. ne ne p'vint ranc f'v  
 come ce fu Cublai pmer leu  
 est seigneur de touz les auars. d'hu  
 de 4 de ceus de leu air. 4 de ceus de pou.  
 Car tuz sont si bene 4 subge. alu. Et  
 se grant pou. touz montent se en  
 ce nre tuz tout apremier. Et  
 chies que nre lignie. k. et tuz al  
 qui sont descendu de leu pmer se  
 guent. En g'imo. k. sont p'vint en  
 ce nre. en bne montaigne qui est  
 appellee alcu. Et ou que nre seig  
 neur. unne si est il p'vint en ce nre  
 celle dite montaigne avec les auars  
 Car se il est vint. Et iom nre long  
 de ce nre lieu. si com vint il qui sont  
 app'vint pou. en ce nre. Et a vint di  
 va. une grant merueille. Car au  
 il p'vint le cors pou. en ce nre. a  
 nec les auars touz ceus que il au  
 vint en la noie touz. un moie. p'vint

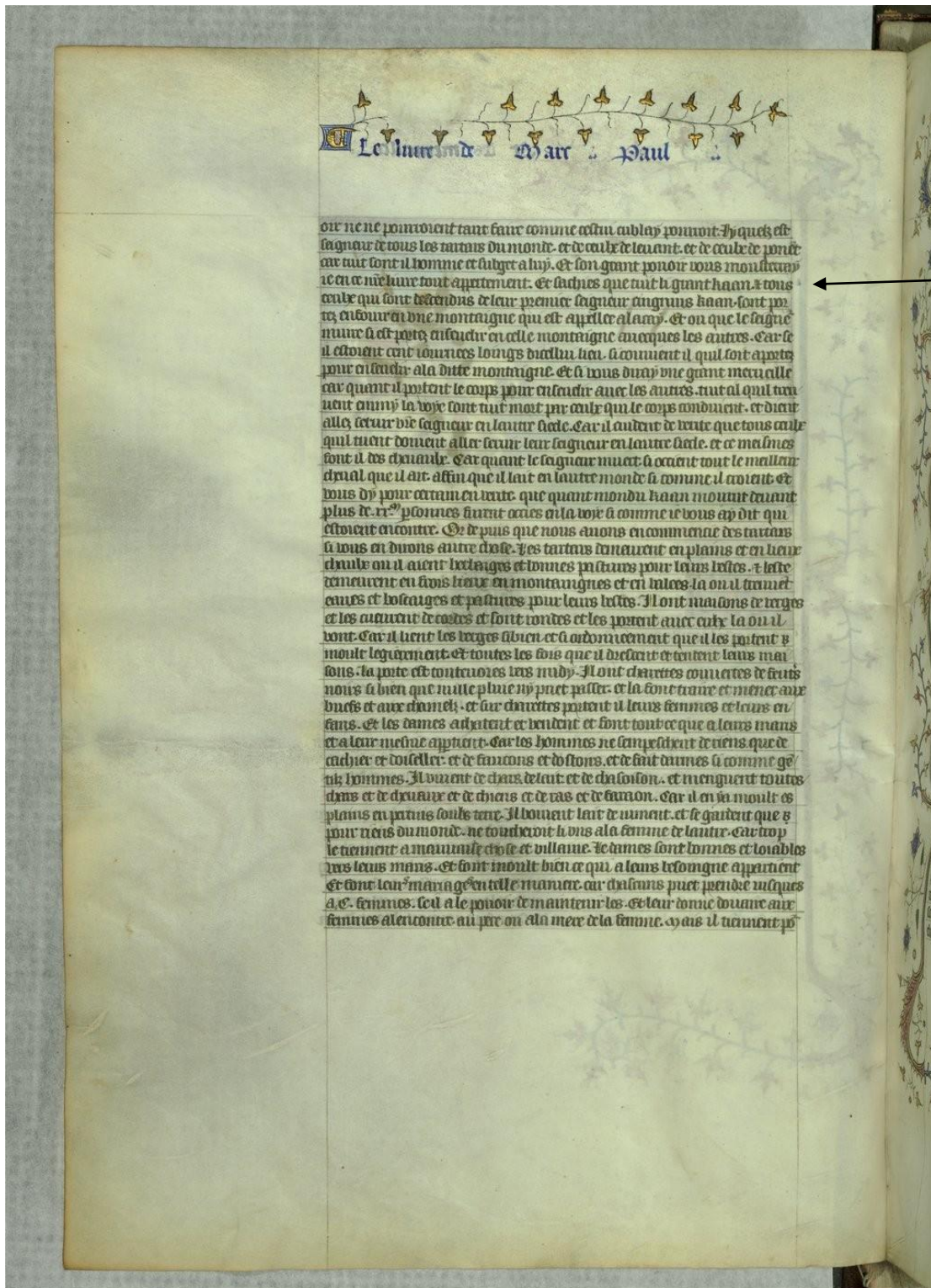
ceus qui leu condiment. Et dient  
 a les seur. v. seigneur. en la nre a  
 ecle. Car il auent de l'ent que touz  
 ceus qui nre d'vint aler seur  
 leu seigneur. en la nre monde. Et  
 ce meistes sont il des cheuans. Car  
 auant le seigneur. unne. si occient  
 touz le mellon. cheual que il au. acc  
 que il soit en la nre monde si ome il  
 auent. Et vint di pou. certam en ce  
 nre que auant avoudu. k. moie  
 deuant plus des. p'vint finent  
 occient en la noie si come se l'vint en  
 dit qui est vint en contie. Et de plus  
 auent ou auent ome nre des ranc  
 auent en d'hu. auant chose. Et auant  
 de moie. en plam. et en lieue. et  
 ou il auent herbage. al vint p'vint  
 pou. leu. seur. Et liste de moie. en  
 en son lieu. en montaigne. et en  
 valeo. la ou il treuient vint. et de  
 coge. 4 p'vint. aler. seur. Et ou  
 meoie. de nre. et leu. auent. de  
 corde. 4 sont. vint. 4 les. p'vint. a  
 nec. au. la ou il vint. Et il lieue  
 les. vint. si bene. et si d'vint. ment  
 que il. leu. p'vint. m' seigneur. en  
 Et touz les. pou. au. il. d'vint. et  
 treuient. leu. meoie. la. p'vint. au  
 te. pou. de. nre. m' di. Et ou. d'vint. et  
 com. d'vint. de. seur. nre. si bene.  
 que. nulle. p'vint. p'vint. p'vint. et la  
 sont. nre. 4. meier. au. bues. et a  
 cheuans. Et si. d'vint. p'vint.  
 il. leu. fames. et leu. en. d'vint. et  
 d'vint. a. cheuans. 4. vint. et. vint.

ex qui alcu











la melleur et plus loial la premier femme. ih ont plus fih que les au-  
 tres gens. pour ce que il ont tantus femmes comme ie vous ai dit. Il prei-  
 nouit bien leur coustume. et de leur pere melleur il prenent bien la femme de  
 pere pour tant quelle nait este la mar. Et ce fait le gaigner fih des autres  
 car les autres non. Et prennent bien encore la femme son frere. quant  
 il meurt. Et quant il le meurt il font moult grant noces.



**Cy dist du dieu des tartars.**

**T** tartars que leur loy est telle comme ie vous dunt. car  
 il ont un dieu que il appellent nangan. Et dient que  
 il est dieu tartar qui garde tous crimes et tous bestes et les  
 vies. Et il sont grant reuerence et grant honneur. car quel  
 uns ont un en sa maison. et est fait de fustre et de draps.

Et auis sont la femme et les enfans la moultice et mettent a laudire. Et  
 les enfans sont tres amé fait comme il est. et quant il meurent il pre-  
 nent de la char grasse et lui oignent la lounde et a la femme et a les enfans  
 et puis prennent du lounde de la char et le quantent dedens la porte de leur  
 maison. et leur meue a ce la part du mengier. il boient leur de lounde  
 ou et manire qui semble de blanc et lon a toure il appellent quenna.  
 leurs vestemens sont tant le plus de draps a ce et de draps de fine fourure de  
 robes pennes de laines et de draps et de tous et de robes moult richement. Et  
 tous leurs deniers sont moult beaux et de grant vaillance. leurs armes  
 sont arc et pilles et espees et maies. mais des ars font plus que d'autres  
 choses. car il sont trop bons archiers les melleurs que la fude ou mou-

de  
 me  
 rap  
 vos  
 po  
 que  
 ar  
 te  
 met  
 alle  
 il ten  
 dunt  
 s'ault  
 fins  
 allur  
 et  
 uant  
 qui  
 tras  
 u har  
 lete  
 met  
 rages  
 u il  
 ne v  
 mai  
 frus  
 cr au  
 an  
 ans  
 ce  
 e ge  
 gures  
 de es  
 que e  
 trop  
 lables  
 ment  
 de que  
 e au  
 ent po



(f. 22v)

Uo ordo qd. p. memorie dicitur fu grandanno impio regiam p  
 vdo humo et sano ora abiamo contate come glitartu et  
 boro impia singuora Cisi Cinghy chane et reguora qd. vi  
 nfo v. p. o. Giobany ordo rano q. loro reguora et q. loro v. p.  
 nza

Del numero degli granzani, quanto furono

Appiato veramente che apresso Cinghy chane fu Cinghy chane  
 loterz barga lo parte alon lo quinto q. q. lo p. o. Cablan  
 et q. o. a p. u. podere et essetutti shalri fossero insieme no  
 n. potrebbono amoro tanto podere quanto a q. o. d. a. p. o. r. e. q.  
 oggi ac nome granzane cioe Cablan et d. q. o. p. u. q. o. p. o. t. u.  
 ti usingnori del mondo Cristian et par. o. n. y. fossero insieme  
 non potrebbono fare tanto finabbe chablan chane et d. d. v. o. r.  
 sapere et tutti sh. granzani d. i. t. o. s. i. q. Cinghy chane sono p.  
 t. o. r. a. y. adina montagnia grande lo quale e chiamata al. d. y.  
 conca ligrand singuora q. t. a. r. t. e. r. i. m. u. c. i. o. n. e. p. o. m. e. r. i. s. s. o. n. e. r. i. o. n. t. o.  
 v. o. r. n. a. t. e. d. a. l. l. a. l. u. n. g. a. a. q. u. e. l. l. a. m. o. n. t. a. n. g. n. i. a. p. e. g. o. n. d. i. e. n. e. r. e. g. o. d.  
 v. i. s. i. o. n. e. p. o. r. t. a. y. et s. i. n. y. d. i. q. u. e. v. n. a. l. t. r. a. c. h. o. s. a. r. e. q. u. a. n. d. o. J. e. o. r. p. i.  
 d. i. g. r. a. n. z. a. n. y. s. o. n. o. p. o. r. t. a. t. i. a. p. o. t. t. e. r. a. r. e. a. q. o. s. t. a. m. o. n. t. a. n. g. n. i. a. p. o.  
 f. o. s. s. e. r. e. a. l. l. h. u. m. a. n. i. x. l. v. o. r. n. a. t. e. o. p. i. u. o. m. e. n. o. t. u. t. t. a. l. e. g. e. n. t. e. r. e. c. h. e.  
 s. o. n. o. I. n. v. e. n. t. a. t. e. p. p. q. u. e. l. l. o. c. h. a. m. m. i. n. o. o. n. d. e. s. i. p. o. r. t. a. i. l. m. o. r. t. o. t. u.  
 t. i. s. o. n. o. m. e. s. s. i. a. l. l. e. J. s. p. a. d. e. et m. o. r. t. i. et d. i. z. o. n. o. l. o. r. o. q. u. a. n. d. o.  
 s. h. u. e. i. d. o. n. o. a. n. d. a. t. o. a. p. u. n. t. e. l. o. v. o. s. t. r. e. s. i. n. g. u. o. r. e. n. e. l. a. l. t. r. o. m. o. n. d. o.  
 c. h. e. v. e. d. o. n. o. c. h. e. t. u. t. t. i. c. h. o. l. o. r. o. c. h. e. s. s. o. n. o. m. o. r. t. i. l. o. d. e. b. b. i. a. n. s. i. v. i. c. a.  
 n. e. l. l. a. l. t. r. o. m. o. n. d. o. et c. h. e. s. t. s. h. u. e. i. d. o. n. o. et c. h. e. s. t. u. e. i. d. o. n. o. s. h. e. z. a. b. a.  
 s. h. e. p. u. n. t. e. s. h. u. e. i. d. o. n. o. p. r. e. q. u. e. l. l. s. i. n. g. u. o. r. e. s. h. a. b. b. a. n. e. l. l. a. l. t. r. o.  
 m. o. n. d. o. et s. a. p. p. i. a. t. o. r. e. g. o. q. u. a. n. d. o. q. u. e. s. t. u. y. c. h. a. n. e. m. o. r. t. o. f. u. r. o. n. o. q. o. r.  
 t. i. p. i. u. d. i. x. x. h. u. o. m. e. n. y. s. h. e. q. u. a. l. y. i. n. c. o. n. t. r. o. v. a. n. o. i. l. c. o. r. p. o. c. h. e. s. t. a. d.  
 v. a. a. p. o. t. t. a. r. e. d. a. c. c. o. c. h. o. m. i. n. i. a. t. o. q. t. a. r. t. e. r. i. s. i. n. o. n. e. q. u. e.  
 c. h. o. s. a. g. l. i. t. a. r. t. e. r. i. a. m. o. r. o. n. o. l. o. u. e. n. o. I. n. p. i. a. n. y. l. u. o. c. h. e. t. o. n. e. a.  
 m. o. l. t. a. e. r. b. a. a. l. t. u. o. n. a. p. o. s. s. u. r. a. p. l. o. r. o. b. e. s. t. i. o. a. p. p. a. t. o. i. n. l. u. o. c. h. e.  
 d. d. i. c. i. n. m. o. n. t. a. n. g. n. i. a. e. i. n. t. e. a. l. l. y. o. n. e. a. c. a. q. u. a. a. p. p. y. et b. u. o. n.



4 VA: [略]

5 P<sup>9</sup>: Bibl. Riccardiana, Ms Ricc. 983-2992, ff. 25r.b16-25v.a1.

(f. 25r)

iam obtinebit i pho  
no pars sup altius p  
em ascendet. Multi  
udine nō ad spectacu  
m cōcurrente dū astro  
logi in libro suoz mē  
acōmū legeret p cesa  
ūdimus s̄ dūmōte et dū  
iū aliā insurgē inde  
at. Tandem pō Chū  
his ascendit sup ptes  
mchan. Quo mō tar  
au de futura cōfictati  
nētoua cōfortati sūt  
ualde. Tercia iḡ die  
dissū ē plūz et multi  
de utriusq; regis cōcū  
nerūt. Chūchū tūmē  
tor cōtūit. et vūchan  
re occisus fuit. Reg  
mō Chūchū post  
mortem vūchan ānis  
vi. in quib; mltas pūc  
acq; sūt. post ānos sex  
dū p̄ suos castū quod  
dam expugnaret. Ipē  
bellas appropinquasset  
ad castū sagita i ge  
m p̄cūsus ē ex quo vūl

tere post dies paucos  
mortuus est. sepultus  
q; est i mōte alchay ubi  
deinde sepelūt omēs re  
ges magni tartaroz  
et qui de p̄gene sūt eoz  
Si magni Raam mōre  
et i mōte q; p̄ dictas  
**C** distaret a mōte Alchay  
sepulchris eoz ad mōte de  
fuerūt ad sepeliendū  
Catalogus Regū tarta  
roz et quali regū illoz  
corpora sepeluntur i mō  
te Alchay. capitū. 54.  
**P**rimus iḡ rex tar  
taroz fuit Chūchū  
Secūsus Cui. Tercū Ba  
cui. Quartū Alan. Cū  
tū Manguth. Sextū  
Cublay. qui mō regē  
Cui potētia maior est  
q; fuit omī p̄uoratorū  
v. p̄decessoz eoz. Alii  
ē et solus ip̄s dūm qm  
sūt simul in vni cūcta  
regna et dūa xpianoz  
regū et omī saracēoz  
sicut in libro hoc suo loco



patebit manifeste. Qui  
 nō corpus magnum Raa  
 timulādu; defectu  
 ad mōtē Alchay. hūq  
 cū ad sepulchra cōcōi  
 tant' hoīes cūctos quos  
 in ma hnt obmos gla  
 dio phimūt dicentes.  
 Ite et dno nro regi in  
 aha mta seruite. Tanta  
 ei insana a sathana.  
 cūcti s' ut credat occi  
 sos. tūc occōe p'dtā i mta  
 aha eius fore obsequio  
 mācipandos. Sibi est e  
 quos omīe obmos. nec  
 nō et defūcti regis eqs  
 eltos occidūt ut ipōs i m  
 ta aha vmos recipiat.  
 Cū aut corpus māguth  
 Raa; delatus fuit ad mō  
 tē milites qui ducebat.  
 corpus vlt. xx. milia  
 hoīm occasione p'dtā oc  
 ciderūt. De gūalib; sine  
 tudinib; et morib; tarta  
 roz; Caplin. 55.  
**T**artari cor. gges ml  
 tos intunt iunctoz

et ouum. pp qd cū g'ib;  
 suis morant' in pascu  
 ris. Estate in montibus  
 hntant' et in locis fugi  
 dis ubi pasua et ligna  
 sunt. Hyeme nō ad cali  
 das se trāserūt regioēs  
 ubi iūctē possunt pro  
 aiālib; pabulū. Domū  
 nias ad mod' tabnacu  
 loz hnt. filtro optime  
 clausas quas secū defe  
 rūt quocūq; diuertunt.  
 sic sūt artificiose cōpost  
 te ut de facili exportari  
 deponi et portari ualeat  
 quoz hostia semp ad me  
 ridiem situant' qm do  
 mūculas erigūt. Qua  
 drigas in sup hnt q a chy  
 melis trahūt filtro sili  
 sic artificiose coop'tas ut  
 si die tota sup eas pluat  
 nichil sub eis ualeat ma  
 didari. Dup eas aut vro  
 zes et filios ac utēsilia  
 nctā deferūt. Mulieres  
 tartaroz iuris suis fide  
 lissime sūt. Apud eos ab